

沼夫人

泉鏡花

青空文庫

一

「ああ、奥さん、」

と言った自分の声に、ふと目が覚めると……室内は真暗で黒白が分らぬ。寝てから大分の時が経たらしくもあるし、つい今しがた現々したかとも思われる。

その現々たるや、意味のごとく曖昧で、虚気としていたのか、ぼうとなっていたのか、それともちよいと寝たのか、我ながら覚束ないが、

「ああ、奥さん、」

と返事をした声は、確に耳に入つて、判然聞こえて、はつと一ツ胸を突かれて、身体のだつかが、がつくりと窪んだ気がする。

そこで、この返事をしたのは、よくは覚えぬけれども、何でも、誰かに呼ばれたのに違いない。——呼んだのは、室の扉の外からだった——すなわち、閨の戸を音訪られたのである。

但し閨の戸では、この室には相応わぬ。寝ているのは、およそ十五畳ばかりの西洋室……

：と云うが、この部落における、ある国手の診察室で。

小松原は、旅行中、夏の一夜を、知己の医学士の家に宿ったのであった。

隙間漏る夜半の風に、ひたひたと裾の靡く、薄黒い、ものある影を、臆病のために嫌うでもなく、さればとて、群り集る蚊の嘴を忍んでまで厭うほどこじれたのでもないが、鬱陶しさに、余り蚊帳を釣るのを好まず。

ちとやそつとの、ぶんぶんなら、夜具の襟を被つても、成るべくは、螢、萱草、行抜けに見たい了簡。それには持つて来いの診察室。装飾の整ったものではないが、張詰めた板敷に、どうにか足袋跣足で歩行かれる絨氈が敷いてあり、窓も西洋がかりで、一雨欲しそうな、色のやや褪せた、緑の窓帷が絞つてある。これさえ引いておけば、田圃は近くつても虫の飛込む悩みもないので、窓も一つ開けたまま、小松原は、昼間はその上へ患者を仰臥かせて、内の国手が聴診器を当てようという、寝台の上。ますます妙なのは蚤の憂更になし。

地方と言つても、さまで辺鄙な処ではないから、望めばある、寝台の真上の天井には、瓦斯が窓越の森に映つて、薄ら蒼くぱつと点いていたつけが、寝しなに寝台の上へひよいと突立つて、捻つて、ふつと消した。

「何、この方が勝手です、燧火を一つ置いて頂けば沢山で。」

この家の細君は、まだその時、宵に使った行水の後の薄化粧に、汗ばみもしないで、若々しい紅い扱帯、浴衣にきちんとしたお太鼓の帯のままで、寢床の世話をして、洋燈をそこへ、……

「いいえ、お馴れなさらないと、偶とお目覚めの時、不可いもんですよ。夫でもついこの間、窓を開けて寝られるから涼しくって可いてって、此室へ臥りましてね、夜中に戸迷いをして、それは貴下、方々へ打附りなんかして、飛んだ可笑しかったことがござんすの。可笑いより、貴下、ひよんな処へ顔を入れて、でもまあ、男でしたから宜しかったようなものの、私どもだつたらどうしましょう。そこにございます、それですわ。同じような切を掛けて蔽にしておくもんですから、暗さは暗し、扉の処が分りませんので、何しろ、どこか一つ窓へ顔を出して方角を極めようとしましてね、窓掛だ、と思って引揚げましたのが、その蔽だつたんでしよう。箱の中に飾っておきます骸骨に、ぴったり打撞ったんでございますとき、厭ではござんせんかねえ。」

……と寝台の横手、窓際に卓子があるのに、その洋燈を載せながら話したが、中頃に腰を掛けた、その椅子は、患者が医師と対向いになる一脚で、

「何ぼ、男でもヒヤリとしましたそうですよ。」

と愛嬌よく莞爾した。

「や、そりや、酒田さん驚いたでしょう。幾ら商売道具でも暗やみで打撞っちゃ大変だ。」

「ですから、お気を注げなさいまし。夫とは違って、貴下はお人柄でいらつしやるから、

またそうでもない、骸骨さんの方から夜中に出掛けますとなりません。……婦のだって、

言いますから。」

二

主人の医学士は、実は健康を損ねたため、保養かたがた暢気を専一に、ここに業を開いているのであるが、久しぶりのこの都の客と、対談が発奮で、晩酌の量を過したので、もう奥座敷で、ごろりと横の、そのまま夢になりそうな様子だった折から、細君もただそれだけにして、

「どうぞ御緩り。」

と洋燈を差置き、ちらちらと——足袋じゃない、爪先が白く、絨氈の上を斜めに

切つて、扉ひらきを出た。

しばらくして、女中が入つて来て、

「ここへ、冷水おひやをお置き申します。」

声を聞いたばかり。昼間歩ある行き廻つかつた疲労と、四五杯の麦酒ビールの酔に、小松原はもう現うとう々と、どこへ水差を置いたやら、それは見ず。いつまた女中が出て去つたか、それさえ

知らず。ただ洋燈の心を細めた事は、一緊胸ひとしめを緊めたほど、顔の上へ暗さが乗懸のしかかつた

ので心着くと、やがて、すうすう汐しおが退ひく塩梅あんばいに、灯あかりが小さく遠くなり、遙はるかに見え、何

だか自分が寝た診察台の、枕の下へ滅入めいりこ込んで、ずっと谷底の古御堂ふるみどうの狐格子きつねこうしの奥深

く点ともれたもののごとく、思われた……か思つたのか、それとも夢路たどを辿る峠から覗のぞく景色

か、つい他愛たわいがなくなる。

処を、前に言つた、（奥さん）——で目が覺めたが、真暗まつくら、洋燈はその時消えていた。

枕もたを擡たげて、

「唯今ただいま！」

威勢よく、（開けます）とやろうとする、その扉ひらきの見当が附かぬから、臥床ねどこに片手支ついたなり、熟じつと室まの内みまわをしながら、耳を傾けると、それ切り物の氣勢けはいがせぬ。

「はてな、」

自分で、奥さん、と言ったのに、驚いて覚めたには覚めたが、誰に呼ばれたのか、よくは分らぬ。もつとも、小松原とも立二とも、我が姓、我が名を呼ばれたのでもなければ、聞馴れた声で、貴郎、と言われた次第でもない。

とは言え、呼んだのは確に婦で……しかも目のぱつちりした――

「待て、待て、」

当人寝惚ねぼけている癖に、他の目色めつきの穿鑿せんさくどころか。けれども、その……ぱつちりと瞳すずの清しい、色の白い、髪かみの濃い、で、何に結ったか前髪まへかみのふつくりとある、俯向き加減うつむの、就中すなはち、歴然ありありと目に残るのは、ずっと鼻筋はなすねの通った……

ここまで来ると、この家の細君やの顔ではない。それはもつと愛嬌あいぎようがあつて、これはそれよりも品しなが優る。

勿論、女中などに似ようはないと、夢か、現うつか、朦朧もうろうと認めた顔かたちの容が、どうやらこ
う、目前めさきに、やっぱりその俯向き加減うつむに、ちらつく。従つて、今声を出した、奥さんは誰
だか知れるか。

それに、夢中で感覚した意味は、誰か知らず、その女性にょしやうが、

「開けて下さい。」

と言ったのに応じて、唯今、と直ぐに答えたのであるが、扉ひらきの事だろう？ その外廊下に、何の沙汰さたも聞えないは、待て、そこではなさそう。

「他ほかに開ける処と言つては、窓だが、」

さてはまさしく魘うなされた？ この夜更けに、男が一人寝た部屋を、庭から覗のぞ込んで、窓を開けて、と言う婦おんなはあるまい。

いや、無いとも限らん——有れば急病人の許ところから駈着かけつけて、門を敲たたいても、内で寝入込んで、車夫をはじめ、玄関でも起きない処から、等閑なおいざりな田舎の構かまえ、どこか垣の隙間から自由に入つて来て、直ぐに脊伸せいのびで覗のぞいた奴やつ。

かとも思つたが、どちらを視ながめても、何も居おらず、どこに窓らしい薄明りも射ささなければ、一間開放した筈はずの、帷カーテンの戦そよぎも見えぬ。

カタリとも言わず……あまつさえ西洋室の、ひしとあり、寂しんとして、芬ぶんと、腦ごへ染くる、強い、湿っぽい、重くるしい葉の匂においが、形ある箔はくのように颯さつと来て、時にヒイヤリと寝台を包む。

三

渠は、今更ながら、しとど冷汗になったのを知った。

窓を開けたままで寝ると、夜気に襲われ、胸苦しいは間々ある習で。どうかすると、青い顔が幾つも重つて、隙間から差覗いて、ベソを搔いたり、ニタニタと笑ったり、キキと鳴声を立てたり、その中には鼠も居る。——希代なのは、その隙間形に、怪しい顔が、細くもなれば、長くもなり、菱形にも円くもなる。夕顔に目鼻が着いたり、摺木に足が生えたり、破障子が口を開けたり、時ならぬ月が出でなどするが、例えば雪の一片ごとに不思議の形があるようなもので、いずれも睡眠に世を隔つ、夜の形の断片らしい。すると、今見た女の顔は……何に憑いて露れたろう。

「何だか美しかった。」

と思出して、今度は悚然とした。

「そして、奥さんだ？……奥さんとはどこの奥さんだ。」

確かに此家の細君の顔ではない、あれでなし、それでもなし、目がぱっちりして、色が白く、前髪がふつくりと、鼻筋通り……

と胸の裡で繰返して、その目と、髪と、色艶と、一つ一つ絡まり掛けると……覚がある！

トンと寝台に音を立てて、小松原は真暗な中に、むつくと起きた。

「馬鹿な。」

と思わず呟いた。

「何、そんな奴があるものか。」

いや、いや、もしその人だとすれば——三年前に別れてから、片時も想わずにはおらぬ、寝た間も忘れはしないのであるから、幻も、その倅は当然で、かえって不審くも凄くもない筈。

「開けて下さい、」

と云った……それぞれ、扉を開けるつもりで、目を覚したに違いはない。

且つ現から我に返った、咄嗟には、内の細君で……返事をしたが、かくの通り、続いてちつとも音沙汰のないのと思え。相手は何でも、小松原自分の目には、皆胸にある、その人の倅に見えるのかも知れぬ。

「どこを、何を開けて、と云ったんだろう。」

一体——と渠はまた熟と考えた。

既に夢だと承知しながら、なお何か現在に、事を連絡させようとしている内が、その実、現うつつだつたものらしいが。

窓は開いているし、扉の外は音信は絶えたり、外に開けるものは、卓子テエブルの抽斗ひきだしか、水差の蓋……

いや、有るぞ、有るぞ、棚の上に瓶がある。瓶も……四つ五つ並んでいたろう。内の医せ師んせいが手にかけてたという、嬰児あかんぼの酒精アルコールに浸けたのが、茶色に紫がかって、黄色い膚はだに褐斑かばまだらの汚点しみが着いて、ぐたりとなつて、狗いぬの児こか鼠ねずみの児こかちよいとは分らぬ、天窓あたまのひしやげた、鼻と口と一所に突き出た不状ぶさまなのが、前のめりにぶくりと浮いて、膝を抱いて、呀や！ と一つ声を掛けると、でんぐりかえしを打ちそうな、彼これ大小もあつたけれども、どれが七月児ななつきこか、六月児むつきこか、昼間見た時、医師せんせいの説明をよくは心にも留めて聞かなかつたが、海鼠なまこのような、またその岩のふやけたような、厭いやな膚はだ合あい、ぷつりと切つた胞衣えなのあとの大きな疣いぼに似たのさえ、今見るごとく目に残る、しかも三個。
と考え出すと、南無三宝なむさんぼう、も一つの瓶には蝮まむしが居たぞ、ぐるぐると蛭局とくろを巻いた、胴腹が白くよじれて、ぶるツと力を入れたような横筋の青隈あおくまが凹くぼんで、逆鱗さかうろこの立つたる

が、瓶の口へ、ト達く処に、鎌首を擡げた一件、封じ目を突出る勢。

「一口どうかね。」

と串戯に瓶の底を傾けて、一つ医師が振った時、底の沈澱がむらむらと立つて、煙のように蛇身を捲いたわ。

場所が場所で、扱う人が扱う人だけ、その時は今思うほどでもなかったが、さてこう枕許にずらりと並べて、穏かな夢の結ばれそうな連中は、御一方もお在なさらぬ。

ああ、悪い処へ寝たぞ。

中にも件の長物などは、かかる夜更に、ともすると、人の眠を驚かして、

「開けて下さい。」

を遣りかねまい、と独りで拵えて、独りで苦笑した。

四

寢覚の思いの取留め無さも、酒精浸の蝮が、瓶の口をば開けて給べ、と夢枕に立つた、とまでになる、と結句可笑く、幻に見た婦の顔が、寝た間も忘れぬその人を、いつも

の通り現に見た、と合点が行くと、いずれ一まず安心が出来たので、そのまま仰向けに、どたりと寝た。

急に起上つたのであるけれども、さまで慌しくもなかったらしく、枕は思つた処にちやんとある。ここで、枕の位置が極まると、寝台の向も、室の工合も、方角も定まつたので、どの道暗がりの中を、盲目覗きではあるが、扉、窓、卓子、戸棚の在、所などがしつかり知れる。

上に、その六月目、七月目の腹籠、蝮が据置かれた硝子戸棚は、蒼筋の勝つたのと、赤い線の多いのと、二枚解剖の図を掲げて、隙間一面、晃々と医療器械の入れてあるのがちやうど搔卷の裾の所、二間の壁に押着けて、直ぐ扉の横手に当る。そこには明取りも何にもないから、仄な星明も辿れないが、昼の見覚は違ふまい。同じ戸棚が左右に二個、別に真中にずっと高いのを挟んで、それには真白な切が懸つていた、と寝乱れた浴衣の、胸越に伺う……と白い。茫と天井から一幅落ちたが、四辺が暗くて、その何にも分らぬ……両方の棚に、ひしひしと並べた明晃々たる器械のありとも見えず、寂となつて隠れた処は、雪に埋もれた関らしく、霜夜の刑場とも思われる。

旅行の袂に携えた、誰かの句集の中にでもありそうなのを、偶然目に浮べたは可かつた

が、たちまち、小松原は胸を打った。

本尊！ 本尊！ 夢を驚かした本尊は、やあやあその中に鎮座します——しかも婦の骸骨で、その真白な蔽の中に、襟脚を釣るようにして、ぶら下げた、足をすつと垂れて、がつくりと俯向いたのが、腰、肩、蒼白く繋がって、こればかり冷たそうに、夕陽を受けた庭の紫陽花の影を浴びて、怪しい色を染めたのを見た。

もうこの上には、仇情、貴下、私も無さそうな形ながら、婦というだけ、骨の細りと、胸の辺も慎ましやかに、頤を搔込んだ姿を、仔細らしく視めたが、さして心した、というでもなかったに、余程目に染みたものらしく、晩飯の折から、どうかした拍子だった、一風颯と——田舎はこれが馳走という、青田の風が簾を吹いて、水の薫が芬とした時、——膳の上の冷奴豆腐の鉢の中へ、その骨のどの辺かが、薄りと浮いて出た。

それから前は、……寝しなに細君が串戯に、

「夜中に出掛けますかも知れませんが、婦だつて言いますから。」

と笑ったが、話が陽気で、別に気にもならず寝た。処を、今のその婦が来て……

「ほい、蝮より、この方が開けてくれに縁がある。」

いや、南無阿弥陀仏、縁なんぞないのが可い、と枕を横に目を外らすと、この切がまた

白い。襟えりもと許もとの浴衣が白い。同一色なのが、何となく、戸棚の蔽おおいに、ふわりと中だるみがしつつも続いて、峠の雪路ゆきみちのように、天井裏まで見上げさせる。

小松原はまた肩のあたりに、冷い汗を垂たら々と流したが、大分夜も更けた様子で、冷ひやひ々と、声もない、音もせぬ風が、そよりと来ては咽喉のどを掠かすめる。

ごほんと、乾咳からぜきを咳せいて、搔卷かいまきの襟を引張ひっぱると、暗がりの中に、その袖が一波打ひとなみつて煽あおるに連れて、白おおいい蔽おおいに、襷ひだが入つて、何だか、呼吸いきをするように、ぶるぶると動き出す。

目を塞ふさいでも、こんな時は詮せんがないから、一層また起直つて、確しかと、その実は蔽が見えるのでもなく、勿論揺れるのでもない、臆病おくびょうまなこ眼が震えるのを、見定めようと思つたが、頭が重いのに、瞼まぶたがだるく、耳が鳴る。手足もぐったりで、その元氣が出ぬ。

ままよ、寝つちまえ！　ぐツと引被ひつかぶると、開いたのか、塞いだのか、分別が着かぬほど、見えるものはやつぱり見えて、おまけに、その白いものが、段々拡がって、前へ出て、押立おつたつて、まざまざと屏風びょうぶを立てたように寄つて来る。

五

さあ、その、ふわふわと縦に動く白いものが、次第低に、耐力なく根を抜いて、すつと搔卷の上へ倒れたらしい心地がすると、ひしひしと重量が掛つて、うむ、と圧された同然に、息苦しくなつたので、急いで、匆退けに懸ると、胸に抱合させている手が直ぐに解けず、緊着けられていゝような。

腕を引つこ抜く勢で、腕いて、搔卷をぱつと剥ぐ、と戸棚の蔽は、旧の処にぼうと下つて、何事も別条はない。が、風がまたどこからか吹いて来て、湿っぽい、蒼臭い、汗蒸れた匂が、葉の香に交つて、むらむらとそこらへ泳ぎ出す。

疲れ切つた脳の中に、その臭気ばかりが一つ一つ別々に描かれて、ああ、湿っぽいのは腹籠りで、蒼臭いのは蝨の骸、汗蒸れたのは自分であらう。

そのにおいを見附けたそうに、投出している我が手をはじめ、きよろきよるとす内に、何となくほんのりと、誰だか、婦の、冷い黒髪の香がしはじめる。

香のする方を、熟と見ると、ただやつぱり白い……が、思いなしか、その中に、どうやら薄墨で影がさして、乱しもやらず、ふつくり鬢が纏つて、濃い前髪の形らしく見分がつく、と下から捲上がるごとく、白い切が、くるくると小さくなり、左右から、きりりと緊

つて、細くなつて、その前髪を富士形に分けるほど、鼻筋がすつと通る。

「奥さん！」

と思わず言つて、小松原はまた目を覚した。

トもまだ心着かないで、

「今、開けます。」

と言つて、愕然^{がくぜん}として我に返つた。

「また、夢か。」

今度は目が覚めつつも、まだ、その倂^{おも}が室^{かげ}の中^まに朦朧^{うち}として残つたが、吻^{もろう}と吐^くく呼吸^きにでも吹遣^{ふきや}られるように、棚の隅へ、すつと引いて、はつと留^{とど}まつて、衝^つと失^なくなる。

後^{あと}がたちまち真暗^{まっくら}になるのが、白^{しろ}の一重芥子^{ひとえげし}がぱらりと散^ちつて、一^{ひと}片葉^{ひら}の上に留^{とど}りながら、ほろほろと落ちる風情。

「こりや、どうかしているな。」

現^{うつ}と幻^{みさ}との見境^{かい}さえ附きかねた。その上、寒気はする、頭^{かしら}は重し、いや、耐^たらぬほど体が怠^{だる}い。夜が明けたら、主人の一診^{しん}を煩^{わづ}わそうまでは心着いたが、先刻^{さつき}より、今は起直^たる力がない。

特に我慢のならぬのは、呼吸苦しいので、はあはあ耳に響いて、気の怯けるほど心臓の鼓動が烈はげしくなった。

手を伸ばすか、どうにかすれば、水差に水はある筈はず、と思いながら、枕を乗出すさえ億劫つぐで、我ながら随意まにならぬ。

ちようど、この折だった、びしょびしょ、と水の滴るような音がし出した。遠くで蚊の鳴くのかとも聞えるし、鼠が溢こぼしたかとも疑われて、渴いた時でも飲みたいと思うような、快い水の音おと信しではない。

陰気な、鈍い、濁った——厭果あきはてた五月雨の、宵の内に星が見えて、寢覚にまた糠雨ぬかあめの、その点滴したたりが黴かびた畳に浸込しみこむ時の——心細い、陰気でうんざりとなる氣勢けはいである。

「水差が漏るのかな……」

亀裂ひびでも入っていたろう。

「洋燈ランプから滲出しみだすのか……」

可厭いやな音だ。がそれにしては、石油の臭におがするでもなし……こう精神が濛もとして、ものの香は分るまい。

断念あきらめるつもりにしたけれども、その癖やつぱり、頻しきりに臭う。湿っぽい、蒼あおくさい、

汗蒸れたのが跳廻る。

「ソレまた……」

気にすると、直ぐに、得ならず、時めく、黒髪の薫が颯と来た。

「また夢か。」

いつまで続く、ともうげんなりして、思慮が、ドドドと地の底へ滅入り込む、と今度は、戸棚の蔽が纏つて、白い顔にはならない替りに、窓の外か、それとも内か、扉の方角ではなしに、何だか一つ、変な物音……沈んだ跫音。

六

その音は——今しがた聞え出した、何かを漏れて、雫の落ちる不快な響が、次第に量を増して、そのの大きくなったもののようでもあるし、新たに横合から加わったものようでもある。

何しろ、同一方角に違いない。……開けて寝た窓から掛けて、洋燈がそこで消えた卓子の脚を伝つて床に浸出す見当で、段々判然して、ほたりと、耳許で響くかとする

とまた幽^{かすか}になる。幽^{おもてこ}になって外の木の葉を、夜露が伝うように遠ざかる。――が、絶えたり続いたり云うよりは、出^いつ入りつ、見えつ隠れつするかに聞えて、浸^{にじみだ}出すか、零^{こぼ}れるか、水か、油か、濡れたものが身繕^{うず}いをするらしい。

しばらく経^たつと、重さに半ば枕^{うず}に埋^{うず}んで、がつくりとした我が頭^{かみのけ}髪^けが、その※^{しぶき}……ともつかぬ水分を受けるにや、じとりと濡れて、粘^{ねんばり}々とするように思われた。もう、手で払う元気が無いので、ぶるぶると振ると、これは！ 男^{おとこ}の天窓^{あたま}にあるべくもないが、カラシと、櫛^{くし}の落ちた音……

例のほたほた零れる水と、やがてまた縁が離れて、直ぐ^{あたらし}に新^{あたら}い音^{おと}がはじまり、寢^ね台^{だい}の脚^{あし}から搔^か卷^{いまき}の裾^{すそ}へかけて、こう、一つ持上げては、踏落^{ふみお}す……それも、爪^{つま}先^{さき}で擦^{こす}るでなしに、宙を伝う裾^{すそ}から出^でて、踵^{かかと}が摺^すれ摺^すれに床へ触るらしく、小股^{こまた}に歩^{ある}行くほどの間^{あわい}を措^おいて、しと、しと、しと。

まさかこれぎりに殺されもしまい、と小松原は投^なげに出^でて、身動きもしないでいれば、次第^{まわり}に寢^ね台^{だい}の周^{まわり}圍^{わり}を廻^{まわ}つて、ぐるりと一周^{まわ}りして枕^{まくら}許^{もと}を通^{とほ}る、と思うと、ぐらぐらと頭を取^あつて仰^{あおむ}向けに引落^ひされる――はつとすると、もう横手^{よこて}へ退^のく。

その内に、窓下の点^{した}滴^{たり}が、ますます床へ浸^{しみ}出^だすそうで、初手^{くだん}は、件^{あし}の蹻^{おと}音^{おと}とは、彼

これ間あわいを隔てたのが、いつの間にか、一所になつて、一条濡れた路つながらが繋つつたらしくなる
と、歩行あるく方が、びしよびしよ陰氣に、湿つぽくなつて来た。

これでは目が覚めて見ると、血の足跡が、飛々とびとびに残つていようも知れぬ。

飛々どころか、何として、一面の血か、水であろう、と思われたのは、間も無くであつた。

しとしという尋常らしい登音あしおとが、今はびちやびちやと聞えて来た。水なら踵かかとまで浴かかろ
う深さ、そうして小刻こきぎみに疾はやくなつたが、水田みずたへ踏ふみこ込んで渡るのを畔あぜから聞く位の響おびき。

と卓子テエブルの上で、ざざつと鳴出す。窓から、どんどと流込む。――さてもさても夥多おびただ

しい水らしいが、滝いきおいの勢もなく、瀬の力があるでもない。落ちても逆捲さかまかず、走つても迸ほとばし
らぬ。たとえば用水が畔へ開き、田が一面の湖となる、雨上りあまあがの広田圃ひろたんぼを見ような、
鮒ふなと鰯いしよの洪水めいたが、そのじめじめとして、陰気な、湿つぽい、ぬるぬるした、不気味
さは、大河おおかわの出水でみずの凄すこいに増まささる。

そんな水がどこへ出た、と言われたら、この部屋一面、と答えようと思ひながら、小松
原は但し身動きも出来ないのである。

やがて短夜みじかよが……嬉しや、もう明けそうに、窓から白濁りの色が注さして、どんよりと

光つて、卓子テエブルの上へ翻つた、と見ると、跽音あしおとが、激しくなつて、ばたばたばた、とそこいらを駈けたが、風か、水か、ざつと鳴る時、婦おんなの悲鳴が、

「あッ」

と云う……

「奥さん。」

と刎起はねおきる、と、起きた正面に、白い姿が、髯ふつとある！

「ああ、夢か。」

と気が着いたが、まざまざ垂れたその切きれが、ふっくりした乳にも見えるし、すつとした手にも見える。その辺あたりが、と思うと、円い肩になり、なぞえに白く胸になつて、くびつて腰になつて、すらりと裾のようになる。

あの、雪に、糸ひとすじ一条も懸からぬか、と疑えば、非ず、ひたひたと身に着いた霞のような衣きぬをぞ絡まとう。

と見ると、乳ちの辺あたり、胸へ掛けて、無慚むざんや、颯さつと赤くなつて、垂たら々と血に染まつた。

七

枕に響いた点滴したたりの音も、今さらこの胸からか、と悚然ぞつとするまで、その血が、ほたほたと落ちて、汐しほが引くばかりに、見る間に、びしゃびしゃと肉が萎むしほ、と手と足に蒼味あおみが注さして、腰、肩、胸の隅々くまぐまに、まだその白い膚はだが消々きえきえに、薄らと雪を被かいで残りながら、細々と枝を組んで、肋骨あばらほねが透いて見えた。

「ああ、これだな。」

と合点ゆが行く。

途端に、がたがたと戸棚が鳴った。

自分で正気たしかづいたと、心が確たしかになつた時だけ、現の婦の跽音あしおとより、このがたがたにもう堪たまらず、やにわに寝台ねだいからずると落ちた。

小松原は暗がりを手探りながら、鋭くなつた神経に、先刻さつきから電燈でんきで照らしたほど、室内の見当はよく着けていたので、猶予ためらいもせず、ズシンと身体からだごと扉ひらきの引手に持つて行くと、もとより錠を下ろしたのではない。

ドンと開く。

扉に身体からだが附着くつついて、発奮はつふんんで出たが、跨またいだ足が、そう苦なしには大穴から離りよう

とはせぬので、地獄から娑婆へ踏掛けた体で、独で跪いて、どたんばたん、扉の面と、や、組んだりける。

この物音に、驚破と奥で起直つて、早や身構をしたと見える——慌しい耳にも、なおがったりと戸棚の前の怪しげな響がまた聞えたのに、堪りかねて主人を呼ぶと——向うへ、突当りの縁が折曲つた処に、ぼうと射していた灯が動いて、直ぐに台附の洋燈を手にした、浴衣の胸のはだかつた、扱帯のずるずるとある医師が、右を曲つて、正面へ。

開放した障子を洩れて、だらりと裾を引いた萌黄の蚊帳を横にして、廊下の八分目ぐらいな処で、

「便所か。」

と云う、髯、口許が明々として、洋燈を翳す。

この明で、小松原は水浸しになったほど、汗びっしよりの、我ながら萎垂れた、腰の据らぬ、へとへとになった形を認めたが、医学士はかつて一年志願兵でもあつたから、武備も且つある、こんな時の頼母しさ。顔を見ると、蘇生った心地で、

「やあ。」と掛けた声が勢なく途中で掠れて、

「夜更けに恐縮、」

とやつと根こそぎに室を離れた。……扉を後ぎまに突放せば、ここが当館の関門、来診者の出入口で、建附に気を注^つけてあるそうで、刎返^{はねかえ}つて、ズーンと閉る。

と突出された体^{てい}にしよんぼり立つて、

「どうも、何だ、夜夜中^{よるよなか}、」

医師^{せんせい}は亭主関白といった足取、深更に及んでも、夜中でも、その段は一切頓^{とんじやく}着^くなく、どしどしと廊下を踏んで、やがて対向^{さしむかい}になる時、傍^{かたわら}の玄関の壁越^{すさま}に凄^{いびき}しい軒^きを聞いて、

「^{さかん}壮だ、^{さかん}壮だ。」

と莞爾^{にっこり}する。

顔^{かおつき}色が、ぐつすり寝込んだ処を、今ので呼覚^{よびさま}されて、眠いに迷惑らしい様子もないので、

「どうも気の毒です。酷^{ひど}い目に逢つてね。」

といささか落着く。

医師^{せんせい}は立^{たち}はだかりつつ、

「どうした、蚊軍^{ぶんぐん}の襲来かい。」

なかなか、こんな事を解釈する余裕はなくなつて、

「ええ、」

といかにも気が利かない。

「蚊に城を破られたかよ。」

「そこどころか。」

対手^{あいて}の余り暢気^{のんき}なのが、この際^{うら}怨めしく思われた。

「この中は大変だ。」

「大変だ？」

「何か来たんだ。」

「何、入って来たか、」

と洋燈^{ランブ}を上げて、扉^{ひらき}の上を、ぐいと仰ぐ。

「がたがた遣^やつてる。」

小松原は、ずうつと医師^{せんせい}に身を寄せる、と目を返して、今度はその体^{てい}をじろじろ視^{なが}め
て、

「震えてるね、君は。」

八

「どうだい、心持は。もう爽快さつぱりしたろう。」

主人あるじの医師せんせいは、奥座敷の蚊帳の中に、胡坐あぐらして、枕まくら許もとの煙草盆たばこを引寄せた。

「こういう時は、医師いしやの友達たのもは頼母たのしかろう。ちと処方外の療治りょうちだがね、同じ葡萄酒ぶどうしゆでも薬局で喇叭らっぱを極きめると、何となく難有ありがたみ味あじが違ちがつて、自おのら精神しんが爽快そうかいになります。しかし怯おびえたつけ、ははは。」

と髯ひげを捻ひねつて、牙さ々ええしい。

蚊がぶうんと唸うなつて、齒切はぎしりもどこかです。灯あかりの暗い、鬱うつ陶とうしかるべき蚊帳の内も、主人あるじがこれであるから、あえて蒸暑むしくもないのであった。

小松原は、裾すそを細う、横に手枕で氣を休めていた。

「怯おそえたどころか、一時はそのままになるかと思つた。起きるには起きられず、遁にげるには遁にげられず、寝返りさえ容易やじやない、實際息が留まりそうだったものね。」

咽喉のどを斜ななめに手を入れて、瘦やせた胸おきを圧おさえながら、

「見たまえ、いまだにこの動悸どうきを、」

「色は白くつても、野郎の癩しやくを圧おさえたつてはじまらない。は、は、いや、しかし弱い男だ。」

「ふ、ふ、」

と力抜けた声で笑つて、

「奥さんは？」と俯うつむ向けに額を圧える。

「御心配に及びません。君が侵入に及んだために他室へ遠慮したというんじゃない。小児こどもの奴がまた生意気に、私がちと飲過すと、酒臭い、と云つて一つ蚊帳を嫌います。いや、大おおに台所の内諭ないゆなきにしもあらずだろうが。」

そこで、先刻さつき、君と飲倒れたまま遠島申附かつた訳だ。——空鉄砲からでっぼうの機き会かけもなしに、五斗兵衛むつくと起きて、思おも入いがあつたがね。それつきり目が冴えて寝られないで、いささか蚊帳の広さかなの感あつた処です。

君もちよつとは寝られまい、朝までここで話したまえ。」

折せから陽氣やうきにという積りか、医師せんせいの言は、大おおに諧かい諧ぎやくの調を帯びたが、小松原はただ生真面目きまじめで、

「どうかそうしてくれたまえ。ここを追出されたればといつて、二度とあすこへ行つて寝

る気はしない。どうも驚いた。」

「はじめから奇を好むからです。あすこへ行つて寝るなんざ、どの道好くない。いずれ病人でなくつては乗つからない寝台ねだいなもの。もつとも、私にや大切な商売道具だがね。

しかしそれにしてもあんまりな怯え方だ。夢を見て遁出にげだすなんざ、いやしくも男子たるべきものが……と云つて罵倒ばとうするわけじゃないが、ちとしつかりしないかい。串戯じようだんじゃない、病気になる。

そんなのが嵩こうじると、何も餅屋もちやがつて、ここで病名は申さんがね、起きている真昼間でも目に見えるようになる。それ、現在目に見えて、そこに居るから、口も利くだろう、声も懸けようではないか。傍はたから見ると、直ぐにもうキの字だぜ、恐るべし、恐るべし。何も、朦朧もうろうと露あちわれたつて、歴々ありありと映つたつて、高が婦おんなじやないか。婦の姿が見えたんだつて言うじやないか。何が、そんなに恐いものか。」

「別に見えたつて訳じやない。何だか寝台の周囲まわりを歩行あるいたんだが、そう、どっちにしても婦らしく思われた——それがすぐに、息の詰るほど厭いやな心こころ地もちだつたんではないけれども、こう、じとじとして、湿つぽくツて、陰気で、そこらに鯰なますでも湧出わきたしそうな、泥水の中へ引摺込ひきずりこまれそうな気がしたんで、骨まで浸透しみとおるほど慄然ぞくぞく々々するんだ。」

と肩を細うして、背で呼吸をする。

「男らしくもない、そんな事を言つて梅雨期はどうします、まさか蓑笠を着て坐つてやしまい。」

「うむ、何、それがただのじとじとなら可いけれど、今云う泥水の一件だ、轟と来た洪水か何かで、一思に流されるならまだしもです——灯の消えた、あの診察処のような真暗な夜、降るともつかず、降らないでもない、糠雨の中に、ぐしやりと水のついた畔道に打坐つて、足の裏を水田のじよろじよろ流に擦ぐられて、裾からじめじめ濡通つて、それで動くことも出来ないような思いを一度して見たまえ。」

と力強く云つて、また小松原は溜息で居る。

九

医師は徐に、煙草盆を引寄せて、

「それ、そこが苦労性だと言うのです。窓を開けたまんまで寝たから、夜風が入つて湿っぽかったらただ湿っぽかったで可かろう。何も真暗な夜、田圃の中に、ぐしやりと坐つ

て、足の裏をくすぐ擦られて、腰からひえとお冷通るとまで、こじつけずとももの事だ。その気でお膳げんに向つた日にや、お汁つけの湯気が濛々もうもうと立騰たちると、これが毒のある霧になる、そこで咽むせじ死ににかねませんな。」

「そう一概に言つてくれる事はない。どうせ現在お目に懸けた臆おくび病ようです。それを弁解するんじゃないが、田圃だの、水浸しだの、と誇大に妄想もうそうした訳ではありません。

實際、そんな目に逢つて、一生忘れられん思おもひをした事があるからだよ。いや、考えても身の毛が弥よ立つ。」

フィと起返つて、蚊帳の中をみまわしたが、妙に、この男にばかり麻目が蒼あおい。

医師せんせいは落着いて、煙を吹かして、

「どこで野宿をした時だ、今度の旅でか。」

「ううむ。」

と深く頭かぶりを振つて、

「いつかの時さ、あの一件の……」

と言懸けて、頬のこけた横顔になつて打背うちそむいた。——小松原の肩のあたりから片面かたおもの耳みみかけて、天井の暗さが倒さかさまに襲つたのを、熟じつと見ながら、これがある婦人と心中し

ようとした男だと頷いた。うなず

当時その風説は、友達の間にも誰も知らぬものはなかったが、医学士は、折から処を隔てていたので、その場合何事にも携わらなんだ。もう三年か四年かと、指を折るほど前に、七十五日も通越したから、更めて思出すほどでもなし、おいそれと言に従いて、極りの悪い思をさせるでもなからう。で、一向無頓着に、むとんじやく

「何だい、いつかの一件とは？」

「面目次第も無い件さ。こと三年前だ、やっぱりこの土地で、鉄道往生をし損なった、その時なんです。」

「ああ、そんな事があつたつてな、危いじゃないか。」

と云う内に自から真心が籠つて、おのずこも

「一思いに好男子、粉にする処だつて。勿論、私がこうして御近所に陣取つていれば、胴切にされたつて承合助かる。うけあい洒落にちよいと轢かれてみるなんぞも異だがね、一人の時は危険だよ。」

わざと話に、一人なる語を交えて、小松原が慚愧の念を打消そうとするつもりだった。ことば
ところが案外！この情に、なさけ太く動かされた色が見えたが、おもて面を正しゆう向直った。

「何とも——感謝する。古疵ふるきずの悩なやみを覚えさせまい、とそうやって知らん顔をしてくれる
のは真まことに嬉しい、難ありがた有たいが……それでは怨うらみだ。

ねえ。

あれほどの騒ぎだもの。ことに自惚うぬぼれらしいが、私の事を忘れないでいてくれる君が、
しかもこの土地へ来ていて、知らないという法はない。承知の上で、何にも知らん振ふりをし
てくれるのは、やっぱりあの時の事を、世間並に、私が余処よそこの夫人を誘って、心中しそくを仕
損なった、とそう思っているからです。

勝手な事を言うものには、言わしておいて構わんけれども、君のような人に対しては、
何とももって恥入こまぬるんだ。」

と俯向うつむいて腕こまぬを拱なまけき、

「その君の情なさけある心で、どうか訳を聞いて欲しい。くどい事は言わん。何しろ、少なくとも
も君だけには言訳をする責任があると思う。」

医師せんせいは潔く、

「承わろう。今更その条道すじみちを話して聞かせる……惚気のろけなら受賃を出してからにしてもら
おうし、愚痴ぐちなら男らしくもない、止よしたまえ——だが、私たちが誤解をしているんなら、

大に弁じて聞かせてくれ、今まで疑っていたから私にも責任がある。」

「そう、きつぱりとなられては、どうもまた言出しにくい。」

「可いじゃないか、その容体を聞かせたまえ、医師には秘密を打開けて可いもんだ。」

「……………」

言淀んで見えたので、ここへ来い、と構を崩して、透を見せた頬杖し、ごろりと横になつて、小松原の顔を覗込みつつ、

「で、何か、その晩、田圃に坐つたのか。」

と軽く扱つて誘を入れた。

十

「まあ、坐つたんだ。」

小松原は苦笑して頬を撫でたが、寂しそうに打傾き、

「土下坐をしたというわけでもないが、やつぱり坐っていたんだよ。」

「またどうしてだい。」

と醫師せんせいは寛くわんいだ身の動作こなしで、搔か卷まきの上へ足を投なげて、綴つづり糸いとを手で引張ひっばる。

「それがね、」

と熟じつと灰吹を見詰めめてから、静かに巻まききたばこを突つ込こみながら、

「はじめは何でもない事だった。――何の気なしに、あの人を、そこいらへ散歩に誘よつたんです。」

「あの人ツて？」

「……………」

「ははあ、対あいて手の貴婦人だね。」

「そんな事を言わないで、」

と吸口つっこをもつと突つ込こむ。

「可いいじゃないか、何も貴婦人と云つたつて、直ぐに浮気だ、という意味ではないから。」

「何、貴婦人に違いはないが、その対あいて手が悪い。」

「可よし、可よし、黙もつて聞きこう。そうまた一々氣にしないでお話しなさい。そこで。」

「御存じの通り、あの前の年から、私は体が悪くつて二年越この田舎へ来ていたんだ。あの人は、私が世話になつてゐる叔父が媒なこうど酌しやく人で結婚をしたんだろう。大して懇意ではないが

見知り越でいたのだった。

ちやうど戦争のあつた年でね。

主人は戦地へ行つて留守中。その時分、三才だつた健坊と云うのが、梅雨あけ頃から咳が出て、塩梅が悪いんで、大した容体でもないが、海岸へ転地が可い、場所は、と云つて此地を、その主治医が指定したというもんです。

小児の病氣とはいいいながら、旅館と来ると湯治らしく、時節柄人目に立つ。新に別荘を一軒借りるのも億劫だし、部屋借が出ず入らず、しかるべき空座敷があるまいか、と私が此地に居た処から、叔父へ相談があつたというので、世話をするように言つて来た。

そちこち聞合せると、私が借りていた家から、田圃の方へ一町ばかり行つた処に、村じや古店で商も大きく遣つてゐる、家主の人柄も可し、入口が別に附いて、ちよつと式台もあつて、座敷が二間、この頃に普請をしたという湯殿も新しいし、畳も入替えたのがある。直ぐに極めて、そこへ世話をして、東京から来る時も、私が停車場へ迎いに行つて、案内をしたんだつてが、七月盆過ぎから来ていて、九月の末の事だつたよ。

五日ばかり降続いて、めつきり寂しくなる。朝晩は、単衣に羽織を被て、ちとまだぞくぞくして、悪い陽気だとばかり、言合つて閉籠つていた処……その日は朝から雨が上つ

て、昼頃には雲切くもぎれがして、どうやら晴れそうな空模様。でもまだ、蒼空あおぞらは見えなかつたが、多日しばらくぶりで、出歩である行くに傘は要らない。

小児こどもを歩行かせるには路みちが悪いから、見得張らない人だ、またおんぶをして、宿の植込の中から、斜はすつかいに私の前二階を覗のぞいて、背中の小児に言わせるように、前髪を横向けにして、

（お出掛けなさいませんか。）

と浜を誘いに見えるだろう。

（小松……君。）

と原抜きにして、高慢あどけに仇気なく高声で呼ぶ、小児の声が、もうその辺から聞えそうだ、と思つたが、出て来ない。

その内、湯に入ると、薄うつつりと湯槽ゆふねの縁へ西日がさす。覗のぞくと、空の真白まっしろな底に、高くから蒼空うちわが団扇うちわをどけたような顔を見せて、からりと晴れそうに思うと、罫かこいの外を、

（水が出たぞ。）

（田圃一面。）

と饒舌しゃべつて通つた。

これを聞くと、何か面白い興行でもはじまったような気がして、勇んで、そわそわして、早く行つて見たくつて、碌ろくに手拭てぬぐいも絞らないで、ふらんねるを引ひっかけたなり、帽子も被かぶらずに、下駄つツを突掛けて出たんだがね。」――

十一

「汎水でみずだ、と云つたつて、この通り、川らしい川のない処だから、駈出かけだして見物に行くほどの事もなさそうなもんだけれど、私は何だ。……

董すみれ、茅花つばなの時分から、苗代、青田、豆の花、蜻蛉とんぼ、螢、何でも田圃すきが好で、殊に二百十日前後は、稲穂の波に、案山子かかしの船頭。芋※ずいきの靡なびく様子から、枝豆の実る処、ちと稗ひえまき蒔まき染しんみた考かんえて、深山しんさん大沢だいたくでない処は卑怯ひきようだけれど、鯨くじらより小鮒こふなです、白鷺しらぎ、鶉うずら、鵲ばん、鵲せきれい、皆みんなな我々われわれと知己ちかづきのようで、閑古鳥かんこよりは可なつかし懐かしい。

山、海、湖などがもし天然の庭だったら、田圃はその小座敷だろう。が、何しろ好きでね、……そのせいか、私には妙な事がある。

いつ頃からかはよく分らんが、床に入つて、可いい心持に、すつと足のぼを伸のばす、背せなかが浮ういて、

他愛なくこう、その華胥の国とか云う、そこへだ——引入れられそうになると、何の樹か知らないが、萌黄色の葉の茂ったのが、上へかかって、その樺色の根を静に洗う。藍がかつた水の流が、緩く畝つて、前後の霞んだ処が、枕からかけて、睫の上へ、自分と何かの境目へ露れる。……

トその樹の下に、箒か何か手に持つて、まあ、膝ぐらいな処まで、その水へ入つて、そつと、目高か鮒か、掬つてる小児がある。其奴が自分で。——ああ、面白そうだと思うと、我ながら、引き入れられて、身節がなえて、嬉しくなる。その内に波立ちもしないで、水の色が濃くなつて、小濁りに濁ると思うと、ずっと深さが増して、ふうわり草の生えた土手へ溢るんだがね、その土手が、城趾の濠の石垣らしくも見えれば、田の畔のようでもあるし、沼か、池の一角のようでもある。その辺は判然しないが、何でも、すつと陽炎が絡る形に、その水の増す内が、何とも言えない可い心地で、自分の背中か、その小児の脚か、それに連れて雲を踏むらしく糶上ると、土手の上で、——ここが可訝しい——足の白い、綺麗な棲をしつとりと、水とすれすれに内端に搔込んで、一人美人がイむ、とそれと自分が並ぶんで……ここまで来るともう恍惚……

すやすや寝ます。

枕に就いて、この見える時は、實際子守唄で賺かされるように寝られる。またまったく心持の可い時でないと見えんから、見えない時でも見るようにと心掛ける——それでも、散らかつて、絡まらないで、更に目に宿らん事が多い。そういう時は、きつと寝そびれて悩むんだ。

そこで、大好きな田圃の中でも、選分けて、あの、ちよろちよろ川が嬉しい。雨上りにちつと水が殖えて、畔へかかった処が無類で。

取留めのない事だが、我慢して聞きたまえ。——本人にも一向掴え処はない。いつも見る景色だけれども、朝だか、晩方だか、薄曇った日中だか、それさえ曖昧で、ただ見える。

さあ、模様が詔向きとなつたろう——ところで、一番近い田圃へ出るには、是非、あの人が借りていた、その商家の前を通るんだつたよ。

店はずれて、ひよろひよるとした柳で仕切った、その門を見ると、小児が遊んでいたらしく、めんこが四五枚、散に靴脱ぎのたたきの上へ散つて、喇叭が一ツ、式台に横飛び。……で、投出して駈出したか、格子戸が開放し、框の障子も半分開いて、奥の長火鉢の端が見えた。

その格子戸の潜くぐりの上へ手を掛けて、

（健ちゃん、）

と呼んでみたが、黙っていた。

（居ないの。お留守、）

と遣やると、……そこもやつぱり開いたままの、障子の陰の、湯殿へ通う向うの廊下へ、しとしとと跣あしおと音がして、でも、黙だんまり然で、ちよいと顔だけ見せて覗のぞいたが、直ぐに莞にっこ爾りして、縁側を奥座敷へ上あがった姿は……

帯なし、搔かいど取り気味に褌つまを合せて、胸で引抱えた手に、濡ぬれて手拭ぬぐいを提げていた。二間を仕切った敷居際に来て、また莞にっこり爾すると、……」

「謹聴、」

と医学士せんせいが唐突だしぬけに云った。

「真面目だよ、真面目だよ。」

「湯上りの、ぱつと白い、派手な、品の可い顔を、ほんのり薄紅の注した美しい耳許
 の見えるまで、人可懐く斜めにして、

（失礼、今ね、お返事の出来ない処だったの……裸体美人、）

と云つて花やかな笑顔になる。いかにも伸々と寛容して、串戯の一つも言えそ
 うな、何の隔てもない様子だったが、私は何だか、悪い処へ来合せでもしたように、
 急込んで、

（田圃へ行つて見ませんか、）

と何のあしらいもなく装附けた。

（は、参りましょう、）

と頷いて、台所の方を振り返りながら、

（ちよいと、御免なさいよ。）

支度を、と断るまでもなく、平常着のままで出は出たが、——その時、横向きになつて、
 壁に向うと、手を離れた。裾が落ちて、畳に颯と捌けると、薄色の壁に美しく濡蔦が擲
 んで絵模様、水の垂りそうな濡毛を、くつきりと肱で劃つて、透通るように櫛を入れる。
 ちようどその柱に懸けて、いかな姿見が一面あつた——勿論、東京から御持参の品じ

やない。これと、床の間の怪しい山水は、家主のお愛想なんです——あの人がまた旅へ姿見を持つて出るような心掛けなら、なに、こんな処で、平気でお化粧つくりをする事もなからう。熟じっと見てもいられますまい。この際、どこへ持つて行こうか、と背ける目を掠かすめて、月の中を雪が散った……姿見に映った胸で、……膚はだの白い人だつけ。

直ぐにそれは消えたけれど、今のその棲つまはずれの色合は、どうやら水際に足を白く、すらりと立つた姿に見えたが……

ああ、その晩方、幻のような形で、二人して、水の上に立つようになったんだ。

何に誘われて出たんだか、——とうとうあんな酷ひどい目に逢う原因もとだったがね。別に怪しいものじゃない、自分が時々見る美しい、嬉しい夢、——いや、夢じゃない、我が心に、誘さそ出されたものかと思う。」

小松原は、現うつつのように目を睜みはつて、今向直つて気を入れた、医師せんせいの顔を瞻みまりながら、「また愚痴だ、と言うだろうが、後で考えれば、私は今までの経験に因ると、いつでも、湯の中でフイと気が立って、何だか頻しきりにそわついて、よくも洗わないで飛出した時に限って、余りめでたい事がない。一度も小児こどもの時だった、やっぱりそういう折に大怪我をしたのを覚えている。

それにね、そんな風で停車場へ迎えに行つて、連れて来て、家も案内する、近所で間に合せの買物まで、一所に歩行いて、台所の俎、摺鉢の恰好まで心得てるような關係になつていたから、夏の中も随分毎日のように連立つて海岸へ行つたんで——また小児のために、それが何よりの目的なんでね。

来たてには、手荷物の始末、掃除の手伝いかたがた、馬丁と、小間使と女中と、三人が附いて来たが、煮炊が間に合うようになると、一度、新世帯のお手料理を御馳走になつた切り、その二人は歸つた、年上の女中だけ残つて。それも戦時の遠慮からです。

一人になつたが、女中には大した用があるんじゃない。どうせ旅の事で、何を極つて、きちようめにしなければならんでもなし、一向気取らない女主人で、夜も坊ちゃんを真中へ、一ツ蚊帳に寝るほどだから、お茶漬をさらさらで、じゃかじゃかと洗つてしまえば埒は明く。女中も物珍らしく遊びたいから、手廻しよく、留守は板戸の開閉一つで往來の出来る、家主の店へ頼んで、一足後れ馳せにでも、

(坊ちゃん)……か何かで、直ぐに追着く。

だから、いつでも女中が一所で、その健坊と四人連れ立たないのは珍らしい、まあ、ほとんど無かつたろう。

浜に人影がなくなつて、海松ばかり打上げられる、寂しい秋の晩方なんぞ、誰の発議だつたか、小児が、あの手遊おもちゃのバケツを振提ぶらさげると、近所の八百屋へ交渉して、豌豆えんどうまめを二三合……お三どんが風呂敷で提げたもんです。磯へ出ると、砂を穿ほつて小さく囲つて、そこいらの燃料もえくさで焚附たきつける。バケツへ汐汲しおくみという振事があつて、一件ものをうでるんだが、波の上へ薄うつつりと煙が摩なびくと、富士を真正面まっしょうめんに、奥方もちつと参る。が、落日に對して真まことに氣高い、蓬菜ほうらいの島にでも居るような心持のする時も、いつも女中が随ついていたのに。」

十三

「それが、その時に限つて二人きりだつた。もつともね、

(健ちゃんは?) ツて聞いたんだ。

(そこいらに居ましょう。)

と藤色の緒の表おもてつき附つの駒下駄こまげたを、紅べにの潮きした爪先つまさきに引掛ひっかけながら、私が退のいた後へ手を掛けて、格子から外を覗のぞいた、門かどを出てからで可よさそうなものを、やつぱり雨に閉とじこ

籠^もった処を、四五日振りの湯上りで晴^{せい}々^{せい}して、戸外へ出るのが嬉しくつて、気が急^せいたものらしかった。

帯もざつとした引掛^{ひっかけ}結びで、

（おや、居ませんか？）

ツて蓮葉^{はすは}に出て、直ぐ垣隣りの百姓屋の背戸を覗^{のぞ}込んで、

（健ちゃん、健ちゃんや。）

と呼ぶと、急に、わやわやと四五人小児^{こども}の声^{こゑ}がして、向うの梅の樹の蔭で、片手^{ぽうち}に棒^{ぼう}千切^{ぎれ}を持つて健坊が顔を出した。田圃^{たんぼ}へお出^いで、と云うと、

（厭^{いや}だべい。）

で突掛^{つつかか}るように匆^{はなつ}附ける、同じ腕白^{なかくま}夥^な間に大勢^{なせみ}馴染^{なじみ}が出来たから、新仕込のどんべいか何かで、色も真^ま黒^{くろ}になった。母^{かあ}様^{さん}がまたこれを大層喜^{よろこ}んでいたもんです。

（じゃ遊^{あそ}んでるか。母様は運動に行^いつて来るよ。）

（うん、）

と云うと、わつと吶^と喊^きを上げて、垣根の陰へ隠れたが、直ぐにむらむらと出て、鶏^{とり}小屋^{こや}の前で、健ちゃんは素飛^{すつと}ぶ。

(お庇^{かげ}様で、この頃の悪い陽気にも障らなくなりましたよ。)

と嬉しそうに見えて、

(どちらへ?)と聞く。

(踏切の方へ行つて見ましよう。水が出たそうですから。)

百姓家二三軒でもう暇^{なわて}だが、あすこは一方畑だから、じとじと濡れてるばかり。片方^{かたつぽ}

に田はあつても線路へ掛けて路が高い。ために別に水らしい様子も見えん。踏切を越して

土手を畦^{あぜ}伝いに海岸の方へ下りると、なぞえに低くなるから、そこへ行けばよろちよ

ろ見えよう——もつとも汎水^{でみず}と云うほどの事はどの道ないのだから、暇を帰る百姓も、私

たちのぶらぶら歩行^{あるき}を通過す大八車の連中も、水とも、川とも言うものはなく、がったり

通る。

路は悪かった。所々の水溜^{みずたまり}では、夫人^{おくさん}の足がちらちら映る。真中^{まんなか}は泥濘^{ぬかるみ}が甚^{ひど}

いので、裾^{すそ}の濡れるのは我慢しても、路傍^{みちばた}の草を行^ゆかねばならない。

停車場^{ステーション}は、それあすこだからね。柵の中に積んだ石炭が見える、妙に白^{しろ}光^{びかり}に光つ

て、夜になると蒼^{あお}く燃えそう。またあの町の空を、山へ一面に真黒な、その雲の端が、白

く流れ出して、踏切の上を水田^{みずた}の方へ、むらむらと斑^{まだら}に飛ぶ。が海^{いだ}を抱いた出崎の隅だけ

朗かな青空……でも、何だか、もう一拭い拭を掛けたいように底が澄まず、ちょうど海の果^{はて}と思う処に、あるかなし墨を引いた曇^{くもり}が亘^{わた}つて、驚破^{すわ}と云うとずんずん押出して、山の雲と一絡^{まと}めにまた空を暗闇^{くらやみ}にしそうに見える。もつともそれなり夜になるうが、それだけに、なお陰気で、星は出そうにもなし、雨になると戸を閉めるから、遠い灯^{ともしび}の影も見られなそうな夕暮だった。

(もう、お天気になりましたよね。)

(さあ、)

とは云ったがどうも請合いかねる。……明^{あから}白^{さきま}に云うと、この上降続いちや、秋風は立つて来たし、さぞ厭^あき厭^あきして、もう引上げやしまいか、と何だかそれが寂しかったよ。風はなかった。稲葉がそよりともせぬ。けれども何となく、ざわついて海の波が響くよ。うなは、溢^{あふ}れた水が田へ被^{かぶ}るそれらしかった。

踏切を渡ると、鴉^{からす}が一羽……その飛んだ事したら——吃^{びつくり}驚^{おどろ}したほど、頭の上を矢を射るように、目を遮つて、低い雲か、山の端^はか、暗い処へ消えたつけ……早や秋だったねえ。雨^{あま}気が深く包みはしたが、どの峰も姿が薄い。

もう少し隧^{トンネル}道の方へ行くと、あすこに、路^{みち}の真^ま中^{なか}に、縦に掛けたちよつとした橋が

ある。棒杭ぼうぐいのように欄干がついて、——あれを横切つて、山の方から浜田へ流れて出る小川を見ると、これはまた案外で、瓦色かわらいろに濁つたのが、どうどうとただ一幅ひとばだけれども畝うねりを立てて、橋の底へすれすれに凄じいほど流れている。いつもは俯向うつむいて、底を見るのが、立つて、伸上つて見送るほど、嵩増かさして、薄の葉すすきが瀬を造つて、もうこれで充満いっぱと云うように、川柳が枝を上げて、あぶあぶ遣やつてた。」

十四

「この水が、路端みちばたの芋大根の畑を隔てた、線路の下を抜ける処は、物凄ものすごい渦を巻いて、下田圃うしろむきへ落ちかかる……線路の上には、ばらばらと人立ひとたちがして、明い雲の下に、海の方へ後向うしろむきに、一筆画ひとふでがきの墨絵で突立つつった。蓑みのを脱いで手に提ひげて鍬くわを支ついた百姓だの、小児こどもを負おつた古女房だの、いかにも水見物をしているらしい。

見ると、堪たまらなく嬉しくなつた。

(さあ、こうしておいでなさい。)

と畦あぜを踏分けて跡をつけては、先へ立つて、畠はたけを切れて、夜は虫が鳴く土手あかを上つたが、

ここらはまだ棲^{つま}を取るほどの雫^{しずく}じやなかった。

線路へ出て、ずつと見ると、一面の浜田がどことなく、ゆさゆさ動いて、稲穂^{いなほ}の分れ伏した処は幾ヶ所ともなしに細流^{せせらぎ}が蜘蛛^{くも}手に走る。二三枚空が映って、田の白いは被^{かぶ}つたらしい。松があつて雑樹^{ひとむら}が一叢、一里塚の跡かとも思われるのは、妙に低くなつて、沈んで島のように見えた、そこいらも水が溢^{あふ}れていよう。

(もうこれだけかね、)

甚だ怪^けしからん次第だつたけれども、稲の上を筏^{いかだ}でも漕^こいでくれたら、と思つて、傍^{そば}に居た親仁^{おやし}に聞くと、

(汐^{しお}があが上^{あが}つたら、まつと溢^{かか}るべい。)

と、腕組をして熟^{じつ}と視^{なが}める。

成程、漁師町を繞^{めぐ}つたり、別荘の松原を廻^{ななや}つたり、七八筋に分れて、また一ツになつて海^{そそ}へ灌^{そそ}ぐが、そこ行^ゆくとこれでも幅が二十間ぐらい、山も賦になれば、船も歌える、この様子では汐^{しお}が注^さそう。

と二人で見ているうち、夕日のなごりが、出崎の端^{はな}から※と雲を射^{ばつ}たが、親仁の額^{おも}も赫^{かげだ}となれば、線路も颯^{さつ}と赤く染まる。稲を潜^{くぐ}つて隠れた水も、一面に倅^{おも}立^{かげだ}つて紫雲英^{げんげ}が

咲満ちたように明るむ、と心持、天の端を、ちらちら白帆しろほも行きそうだった。

またこれに浮かれ立つて、線路を田圃へ下りたんだが、やがて、稲の葉が黒くなって、田どぶぞが溝染めに暮れかかると、次第に褪あせて行くゆく茜色あかねいろを、さながら剥はぎたての牛の皮を拵つまたげた上を、爪つまた立つて歩ある行くような厭いやな心持がするようになった。

ちやうど、田圃道を、八分目ほどで、一本橋がある。それを危あぶなつかしく、一度渡つて、二度目にまた引返してからだった……もう一ひとまた跨またぎで、漁師町の裏へ上あがろうとする処で、思いがけなく行ゆくきついたらうではないか。」

「ふん、どうしてだい。」

と医師せんせいは枕を抱く。

小松原は一息ついて、

「どうして？ ツて、見たまえ、いつもは、手拭てぬぐいを当ても堰留せきとめられそうな、田の切目きれめが、薬研形やげんなりに崩込んで、二ツ三ツぐるぐると濁水にごりみずの渦を巻く。ここでは稲が藻屑もくずになつて、どうどう流れる。もつとも線路から段々下さがりに低いからね。山の裾すそで取囲んだ浜田ありたけの溢あふれ水は、瀬になつて落ちて来るんだ。但し大した幅じやない、一間には足りないんだけれども、深さは、と云う日になると、何とどうです、崩れ口の畦あぜの処に、漁

師の子が三人ばかり、素裸すっぱだかで浸っていたろう。

(どうだ深いか。)

と一ツ当つて見ると、己達おれは裸で泳がい……聞くだけ野暮だ、と突懸つっかり気味に、

(深え。)

(二二丈ふたたけの上あるぜ。)

と口を尖とんがらかしたも道理こそ。此方このほうづれの体ていは、と見ると、私が尻端折しりばしよりで、下駄はだしを持った。あの人もまた遣附やりつけない棲つまを取つて、同じく駒下駄こまげだをぶら提ひげて、跣足はだしで、びしよびしよと立った所は、煤すすはき払の台所へ、手桶ておけが打覆ぶつかえった塩梅あんばいだろう。」

この時一所に笑い出したが。

「ね、小児こどもだつて、本場の苦勞人くろうとが裸で出張しゅちやうつてゐる処へ、膝までも出さないんだ、馬鹿に
するしないで、もつて、一本参つたもんです。

が、まだ威おどかしではないか、と思う末練まつねがあつた。——処へ、ひよっこりしばらく潜ひそつ
ていたのが、鼻はなの前さきへ、ぶつくり浮いた河童小僧かっぱこぞう。

おやと思うと、ぶるぶると顔をやって、ふつと一条仰向けひとすじあおむに水を噴ふいた……深いんで
す。

どうもこれにや逡巡たじろいで、二人で顔を見合せたんだ。」

十五

「そこさえ越せば、漁師町を一廻りして帰れるんで、ちょうど可いくらいな散歩のつもりだったんだが、それだもの、どうして、渡るどころの騒さわぎじゃない。

さあ、引返すとなると、線路からここまでの難儀さが思出される。難儀だつて程度問題、覚悟をしての草鞋掛わらしがけでもあれば格別、何しろ湯あがりのぶらぶら歩き。

それ、今言つた通り跣足はだしです。なるだけ水の上の高い処を、と拾あつて畦あぜを伝え、雨続きで、がばがば崩れる、路を踏めば泥濘ぬかるみで迂する、乾いた処ちつともなし。……

（お危あやのうございますよ。）

（は、大丈夫、）

と声を掛けて、やつと辿たどつたのだつた。また厄介あしかけなのは、縦横に幾ヶ処ともなく、畦の切目があつて、ちよいと薪まきを倒したほどの足掛かかが架かっているが、たださえ落す時分が、今日の出水でみずで、ざあざあ瀬になり、どつと溢あふれる、根を洗つて稲の下から湧立わきたつ勢いきおい、飛べ

る事は飛べるから、先へ飛越えては、おもしろ半分、

(お手をお取り申しましょかね。)

と一畦離れていて云うと、

(是非、どうぞ。)

なんて笑いながら、ま、どうにか通つたんだつけ。浅いと思つた水溜^{みずたまり}へ片足踏込んで、私が前へ下駄^{さき}を脱いだんで、あの人も、それから跣足^{はだし}、湯上りの足は泥だらけで——
ああ、気の毒だと思ふ内に、どこかの流れで、歩行^{ある}してる内に綺麗に落ちる、その位^{みんな}皆水です。

で三町ぐらい、また引返さなけりやならないんでね、それに段々暗くはなる、足許^{あしもと}も悪かろう、うんざりしたが、自分は、まあ、どうなり、さぞ困つた顔をして、と振返る：

：

とこの時……

薄^{うつつ}り路へ被^かつた水を踏んで、その濡色^{ぬれいろ}へ真白^{まっしろ}に映つて、蹴出^{けだ}し棲^{づま}の櫛^{から}んだのが、私と並んで立つた姿——そっくりいつも見る、座敷の額の画^えに覚えのあるような有様だった——
はてな、夢か知らん……と恍惚^{うつとり}となつた。

ざあざあ、地の底を吹き荒れる風のような水の音。

我に返つて、密と顔を見ると、なに大して困つたらしくもなかった。

（ここは通れません。）

（引返しましょう。）

（飛んだ御案内をしてお気の毒です。）

（いいえ、おもしろうござんすよ。こんな奇い態をして。）

と美しく微笑みながら、

（いつそ袂を担ぎましょうか。）

この元気だから。どうやら水嵩も大分増して、橋の中ほどを、蝦蟇が覗くように水が越すが、両岸の杭に結えつけてあるだけが便りで、渡ると、ぐらぐらした、が、まあ、あの人も無事に越した。でも、私の帯へ背後から片手をかけて。

それから——前を見ると、こつちが低いせいか、ぐるぐる廻りに畝つて流れる、小川の両方に生被さつた、雑樹のぞうぞう揺れるのが、累累り、所々煽つて、高い所を泥水が走りかかつて、田も畑も山も一色の、もう四辺が朦朧として来た、稲なんぞは、手で触るぐらいの処しか、早や見えない。

人は一人も居らず、……今渡った橋は、魚の腹のように灰白く水の上へ出ているが、その先の小児などは、いつの間にか影も消えていた。

（小松原さん。）

とあの人が、摺寄って、

（もう一つの路はどうでしょうかしら。）

と云った、様子には出さんでも、以前の難波は、同然に困つたらしい。

もう一つと云うのは、小川が分れて松原の裏を行く、その川縁を蘆の根を伝い伝い、廻りにはなるが、踏切の処へ出る……支流で、川は細いが、汐はこの方が余計に注すから、どうかとは思つたものの、見す見す厭な路を繰返すよりは、

（行つて見ましょう。）

と歩行き出して、向を代えて、もう構わず、落水の口を二三ヶ所、ぎぶぎぶ渡つて、一段踏んで上ると、片側が蘆の茂りで。」

十六

「透かした前途に、蘆の葉に搦んで、一条白い物がすつと懸った。——穂か、いやいや、変に仇光りのする様子が水らしい、水だと無駄です。

（ここにいらつしやい。）

と無駄足をさせまいため、立たせておいて、暗くならん内早くと急ぐ、跳越え、跳越え、倒れかかる蘆を薙立てて、近づくに従うて、一面の水だと知れて、落胆した。線路から眺めて水浸の田は、ここだろう。……

が、蘆の丈でも計られる、さまで深くはない、それに汐が上げているんだから流れはせん。薄い水溜だ、と試みに遣ってみると、ほんの踵まで、で、下は草です。結句、泥潭を迂るより楽だ。占めた、と引返しながら見ると、小高いからずつと見渡される、いや夥しい、畦が十文字に組違つた処は残らず瀬になつて水音を立てていた。

早や暗くなつて、この田圃にただ一人の筈の、あの人の影が見えない。

浜で手鍋の時なんかは、調子に乗つて、

（お房さん。）

と呼んだりしたが、もう真になつて、

（夫人！）

と慌てて呼んだ。

（はーい。）と云う、厭いやに寂しい。

声を便りに駈かけもと戻もどつて、蘆あしがくれなのを勇んで誘い、

（大丈夫行かれます。早くしましう、暗くなりますから。）

誰も落着いてはいないのを、汝うぬが周章あわてて捲まく立てて、それから、水にかかると、あの人が、また渡るのか、とも言わないで、踏ふ込んでくれたんだ。

路もどうやら広いから、なお力になる。押並んで急いだがね。浅くて一面だから、見た処まんなかは沼の真中へ立った姿で、何だか幻の中を行ゆく、天の川でも渡るようで、その時ふとまた美しい色うつくしが、薄濁うすなつた水に映つた——」

小松原は齒かを嚙かんで言洩はなつたが、

（先方さきでも、手を出した……それを曳ひこうと思つた時……

私はぎよつとした。

つい目の前を、足に絡からんだ水よりは色の濃い、重おもつくるしい底そこ力ちからのあるのが、一筋、褐色かばいろの鱗うろこを立ててのたっているのが、向う岸の松原で、くつきりと際立はつて、橋の形が頭あたまれたんだ。

ここに、ちよいとした橋があるんだが、その勢だからもう不可い。水の上で持上つて、だぶりだぶりあおりと煽を打つと、蘆がまた根から穂を振つて、光来々々おいでおいでを極きめてるなんざ、情なさけなからうではないか。

しかも幅一間とは無いんだよ。

(不可いけないのねえ。)

(駄目です、)

と言つたきり。だつて口惜くやしからう。その川一ひとすじ条の前途は、麗々と土が出て、薄うつつりと霧が這はつて、虫の音がするんだもの。もう近いから、土手じゃ車の音はするし、……しばらくにらく睨み詰めて立つていた。」

医師せんせいはむくむくと起きて、平胡坐ひらあぐらで、枕おとがを頤いに突支つつかつて、

「いや、散々、散々、お察し申すな。」

「ところで、いつの間に來たか、ぱくぱく遣つてるその橋はしむこう向へ、犬が三疋と押寄せて、前脚を突立てたんだ。吠ほえる、吠ほえる！ うう、と唸うなる、びようびよう齒向く。変に一面の水に響いて、心細すこくなるまで凄すこかった。

(あちらへ参りましょう、人が見ると悪いわ。)

と低声こしえで、あの人が言う。

（なぜ。）

と思わず口へ出たが、はつと気が付いて、直ぐびちやびちやと歩行あるき出した。

現在犬に怪あやしまれているんです……漁師村を表おもてに、この松原を裏にして、別荘があつて、時々ピアノが聞えたんで、聞きに來た事もある。……奥座敷とは余り離れないから、犬の聲を変がつて、人でも出て來ると成程悪い。

が、何だか今の一言が妙に胸底へ響いて、時めいた、ために急に元氣づいて、

（一奮發遣附やつけましょう。）

と勇いさみが出た。」

十七

「その努力で、蘆の中だけは潜くぐり抜けて、旧もとの方へ引返したが、もう、暗くなって、足許は分らないで、踏むほどの場所がざぶざぶする、じよろじよろ聞える、ざんざという。田だか畦あぜだか覺束おぼつかなく、目印ともなろうという、雑木や、川柳の生えた処は、川筋だから

轟^{ごう}と鳴る、心細さといったら。

川筋さえ避^よけて通れば、用水に落込む事はなかったのだが、そうこうする内、ただその飛^{とびとび}々の黒い影も見えなくなつて、後は水田^{みずた}の暗夜^{やみ}になった。

時に……急^{あせ}つたせい、私の方が真^ま先に二度^{ふたたび}這^はつた、ドンと手を突いてね、はつと起上る、と一のめりに見事に這^はつた。

(あれ、お危い。)

と云う人を、こつちが、

(お気を注^つけなさらないと、)

この通り、ト仕方で見せて、だらしなく起^たつ拍子に、あの人もずると足を取られた音で、あとは默^{だんまり}然、そら解^{どけ}がしたと見える、ぐい、ぐい帯を上げてゐるが陰氣に聞えた。

気が付いて、

(穿^{はきもの}物を持つて上げましょう、)

と注意すると、

(はい、いいえ、可^ようござんす。)

と云つたが、しばらくして、

（流れてしまったようですよ。）

成程、畦あぜの切きれぐち口らしい、どつと落ちるんだ。

（飛んだ事をなさいました。）

（いいえ、どうせ荷厄介なんですもの。さあ、参りましょう。）

愚ぐずぐず図々々していたので、

（可いいんですよ、構やしない。）

とそれでも笑った。この方が私よりまだ元気が可いい。が、私が猶ためら予ったのは、駒下駄に、未練なものか。自分のなんざいつの昔失なくなしている。——実はどちらへ踏出して可いいか、

方角が分らんです。もつとも線路の見当は大概おほずに着いてたけれども、踏ふみどころ処ころが悪いと

水田へ陥はまる。

果して遣った！ 意地にも立つたきりじや居られなくなって、ままよ、と胆たんを据えて、つかつかと出ようとすると、見事に膝つっこまで突込んだ。

（あつ、）と抜こうとして、畦あぜへ腰を突いたつけ、木曾殿落馬です。

お察し下さい、今でこそ話すが、こりや冥土めいどへ来たのかと思った。あの広場ひろつばを手探りでどうするもんかね。……

背後うしろの足弱あしよわが段々呼吸いきづかいが荒くなつてね、とうとう、

(ちつと休みましょう。)

と言ひ出した。雪路以上、随分へとへとに揉抜もみぬいたから。

私は凭懸よつかけるものもなく、ぼんやり暗やみの中に立つたがね、あの人は、と思うと、目の下に、黒髪おもかげが倂立ひだちつ。

(腰を掛けたんですか。)

(ええ、)と云う。

(濡ぬれていましょう。)

(ええ、何ですか、瀬戸物の欠かけがぎくぎくして、)

私は肚胸とむねを突いたんだ。

(不可いけない！ 貴女あなた、そりや塵塚はきだめだ。)

と云う内にも、檻樓切ぼろぎれや、爪うりの皮、ボオル箱の壊れたのはまだしもで、いやどうも、言おうようのない芥あくたが目に浮ぶ。

(でも水の上よりは増ましですわ。)

と断念あきらめたように、何の不足もないらしくさっぱりと言われたので、死なば諸もろともだ、

と私もどつかり腰を落した。むっくり持上つて、跡は冷たい。犬の死骸じやなかうかと、
 摺^{すりぬ}抜けようとしたけれども、頬^{ほお}擦^するばかりの鬢^{びん}の薰^{かおり}に。……

ここで、真^{まこと}に相済まない、余計な処へ誘つたばかりで、何とも飛んだ目にお逢わせ申す、
 さぞ身体^{からだ}に触りましょう、汚させ、濡れさせ、跣^{はだし}足にさせ、夜露に打たせて……羅綾^{らりよう}に
 も堪えない身体^{からだ}を、と言おうとして、言いようがないから、

(荒い風にもお当りなさない。)

とヘマを言つて、ああ厭味^{いやみ}だと思つて、冷汗を搔^かいた処を、

(お人が悪いよ、子持だと思つて、)

これにまたヒヤリとしたように覚えている。」

十八

「それと同時に小児^{こども}の事が氣になつて……言い出すと、女中ともう寝たろう。で、大して
 心配もしない様子、成程寝る時刻、九時ちと過ぎたかも知れない。汽車が二三度上^{のぼり}下^{くだり}
 した。」

この汽車だが……果しはての知れない暗闇くらやみの広野ひろの——とてもその時の心持が、隅々まで人間の手の行届いた田圃とは思われない、野原か、底知れぬ穴の中途——その頼りなさも、汽車の通るのが、人里に近くつて嬉しかった。それが——後には可おそろし悪い偉大おおきな獣けものが、焰ほのおを吹いて唸うなつて来るか、と身震みぶるいをするまでに、なつてしまった。

第一、足の出しようがない。それに……

もうこう夜よも遅くなつては、何事もなく無事に家に帰るとして、ただ二人で今までなんだから、女中はじめ変に思おう。特に出征中の軍人の夫人だ。そうでもない、世間じゃ余計な風説うわさをしている折からだから憂慮きづかわしい。

(どうでしょう。)

と甚だ言兼ねた事ではあつたが、既に——人が見ては悪いわ——と言つてくれた人だから、こう聞いた。が、その実、いいえ、人は何とも思うまい、とこの人だけに、心配をせずに居ようと期したんだ。するとちと案外で、

(さあ、私もそれが気になります。)

返事がこれで。何とも言いようがなくなつて溜息ためいきが出た。あの人もほつと言う。話だけは色めかしい中に、何ともお話にならん事は、腹が、ぐうと鳴る、ああ、情ない何事なさけだらう

う、と氣にするほど、ぐうぐういう。

あの人にも聞えたか。

（お腹が空いたでしようね。）

と来たのにや、赫としたよ、但しそういう方も晩飯前です。……

詮方がない、大声を揚げて見ようかとも言い出したが、こりや直ぐに差留められた。勿論、お怒鳴んなさいと命令をされたつて、こいつばかりは、死んでもあやまる。早い話が、何と云つて救を呼びます、助船でもないだろう、人殺し……串戯じゃない。」

医師は聞く中にも笑出した。

言うものも釣込まれたが、

「今こそ苦笑いも出るけれど、……實際だ、腹のぐうぐう鳴った時は、我ながら人間が求める糧は、なぜこう浅間しい物だろうと熟々思つた。

ところで……

じゃ、何を便りに塵塚に腰を抜いていたか、と言うに、ここも娑婆だから、その内には、月が出ようと空頼み、あの人も恐らくそうでもあつたらう、もつとも何かの拍子に、（戦争に行っている方の事を思えば、こうやって一晩ぐらい、）

とは言つたがね。まさか夜の明けるまでそうして居られるものとは思うまい。

糠雨ぬかあめが降つて来たもの。その天窓あたまから顔へかかるのが、塵塚から何か出て、冷い舌の先で嘗なめるようです。

水の音は次第々々に、あるいは嘲りあざけ、あるいは罵りののし、中にや独言ひとりごとを云うのも交つて、人を憤り世を呪詛のろつた声で、見ろ、見ろ、汝等なんじ、水源みなもとの秘密を解せず、灌漑かんがいの恩を謝せず、名を知らず、水らしい水とも思わぬこの細流せせらぎの威力を見よと、流れ廻り、駈け繞かめぐつて、黑白あやめわかも分ぬ真の闇夜やみよほしを縦に蹂躪ふみにじる。と時々どどどと勝誇つて、躍おどりあが上る氣勢けはいがする。

その流れるに従うて、我が血を絞り出されるようで、堪え難い。

次第に雨が溜たまるのか、水が殖ふえたか、投出あしして足許へ、縮めて見ても流ながが出来て、ちよろちよろと搦からみつくつと、袖が板のように重くなって、塵塚に、ばしやばしやと沫しぶきが掛かる、雫しずくが落ちる。

地鳴じなりが轟ごうとして、ぱつと一条の焰ほのおを吐くと、峰の松が、颯さつとその中に映つて、三丈ばかりの真黒まつくろな面つらが出た、真正面まっしょうめんへ、はた、と留まつたように見えて、ふつと尾が消える。

下りの終汽車らしい、と思つた時、

(あ痛、痛。)

はつと擦寄ると、あの人がぶるぶる震えて、

(胸が。)と云う、齒の根が合わない。

(冷えたんです。)

と言いながら、私もわなわなし出した。」

十九

「一生懸命の声をして、

(さ、お掴んなさい。)

とずっと出すと、びつたり額を伏せて、しっかりと膝を掴んだが、苦痛を堪える恐い力が入って、痺れるばかり。

(しっかり……しっかりして下さいよ。)

背中を擦ろうとした手が込つて、ひやひやと後毛を潜つて、柔かな襟脚に障つたが、

やがて水晶のように冷たいのを感じた。

その時ふつとまた、棲つまの水に映るのが、薄彩色うすさいしきして目に見えたが、それならば、夢になろう、夢ならば、ここで覚める！

膝に倒れたのは、あの人だ。

私は猛然として、思わず抱きながら、引立てながら起上った。

（我慢なさい。こんな事をしていちや、生命いのちにも障りましょう。血の池でも針の山でも構わず駈出かけだして行つて支度して迎むかえに來ます。）

と声も震えながら云うと、

（一人で、どうして居られましょう、一所に。）

ツて、ぐいと袂たもとに掴つかまったが、絞ると見えて水が垂つた。

（田も畦あぜも構わない、一文字に駈け抜けるんです、怪我けががあると不可いけません。）

（可いいの、貴下あなた おんな、婦は最期まで、殿方が頼りです、さ、連れて行つて！）

と縋すがつた手を、しっかりと取合つた。

（じゃ、悪魔に攫さらわれたと、断念あきらめて、目を瞑ねむつて、覚悟をして……）

（は、瞑ねむりました。）

と言われたのにや、ほろりと熱い涙が出た。」

と、小松原は拳こぶしを握った手首をかえして、目を圧おさえて、火入とも言わず、片手を煙草盆にはたと落した。

「考えて見れば怪しい。

はじめからその覚悟をすれば、何も冷え通るまで畦しやがに踞すわるにも当らず。不断見れば掌てのひらほどの、あの踏切田圃を、何に血迷つてたんだか、正気では分りません。いつもの幻と言い、おかしなものに弄もてあそばれてでもいたかと思う……もつともその堪えられない水の中でも、時々変に恍惚うっとりとなると、なぜか雲にでも乗せられたような気がする、その時は、あの人とそうしているのが嬉しかった。

畢ひつきよう 竟ひつきようずるに、言沢沢山の恋かも知れん。

その罰です。

後は御存じの通り、空を飛ぶような心持で、足も地につかず、夢中で手を曳ひき合あつて駈かけ出した処を、あつと云う間もなく、終しま汽車で匆はね飛ばされた。

気が付いた時は、真ま蒼さおな何かの灯あかりで、がっくりとなつて、人に抱えられて、あの人の姿を一目見たんだがね、衣きものを脱がしてあつた。ただ一ひとつ束なめらねの滑かな雪で、前髪と思う

のが、乱れかかつて、ただその鼻筋の通った横顔を見たばかり……乳の辺に血が染んだ、——この方とても、御多分には漏れぬ、応挙が描いた七難の図にある通り。まだ口も利けない処を、別々に運ばれた、それが見納め。

君も知ってる、生命は、あの人も助かったんだが、その後影を隠してしまつて、いまだに杳として消息がない。

これが風説の心中仕損。言訳をして、世間が信ずるくらいなら、黙っていても自然から明りは立つ。面と向つて汝が、と云うものがないのは、君が何にも言わないと同一なんだ。

お房さんも、大方同じ考えだったものだろう。が、これは夫に顔の合わされないのは、道理です。……何も私ばかりが澄まして活きているのじゃない、今ここに、君とこうやっている時を、行方知れず、と思つているものもあるう。あの人もまた、同じように、どこかで心合いの友に、述懐をしていようも知れない。——ただもう一度逢いたいよ。」

と団扇を膝につくと、額を暗うした。

医師は黙っている。

「しかし、」

と、小松原が額を上げた。

二十

「未練だね。世間じや、誰もあの人が活いきているとは思わない。私だって、實際ながら生存ながらえていようとは考えないが、随分その当時、表向きに騒いで、搜索さがしもしたもんだけれども、それらしい死骸も見附からないで、今まで過去すぎさつたんだ。だから、もしやが頼まれる……それかつて、今ここに、君の内にその人が居るから逢え、と云われたって逢われるわけでもないんだが。」

「しかし逢いたいんだ？」

と医師せんせいは笑いながら口を入れた。

「……………」

「成程、そこで斃うなされたんだ。その令夫人に斃うなされたのは、かえって望む処かも知れんが、あとの泥水は厭いやだったろう、全く気の精だな。遁出にげだしたも道理だ。よく、あの板廊下が鉄道の線路に化けなかった。」

「時に、」

小松原は、気が着いたらしく更まつて、

「あの、白骨だがね、」

と皆まで言わせず、手を掉つて、

「大丈夫、その令夫人の骨じやない。」

「骨じやない、」

と鸚鵡返しで、

「けれども、婦のだと言うじやないか。何年経つたんだか、幾十年過ぎたんだか、知れないが、婦には変りはなからう。骨になつても小町は小町だ。」

婦が、あの姿を人目に曝されたら、どんな心持だと思います——君にこんな事を云うのは、解剖室で命乞をするようなものだが、たとい骨でも、一室に泊り合わせたのは、免れない縁だと思う。見えん処へ隠してくれんか。——私はもう、あの人が田圃で濡れた時の事を思つても、悚然とする。どうだね、可哀想だとは思わないかね。」

「そうさな。まさか私だつて、縁日の売薬みたいに、あれを看板に懸けちや置かん、骨を拾つた気なんだから、何も品物を惜みはせんが、打棄つておきたまえ。そんな事を気にするのは宜くないから止したが可からう。」

「貴郎、」
あなた

と優しい声がしたので、小松原は身を縮めて、次の室の暗い中を透かした。暑いので襖は無いが、蚊帳が重ねて釣つてある。その中に、浴衣の模様が、蝶々のように掠れて見えたは細君で、しかも坐つて、紅麻に裳を寄せ、端近う坐つていた。

「何だ、起きていたのか。」

「はい、つい、あのお話しに聞惚れまして、」
ききと

と云うのに、しんみりと涙が籠る。

「どうも、」

とばかりで、小松原は額を压えた。医師は事も無げに、

「聞いたのは構わんよ、沢山泣いて上げろ。だが、そこらへ溢しちや不可んぜ、水が出る
と大変だ。」

「あれ、可厭な。」
いや

「馬鹿だな、臆病。」

「だって、」

と蚊帳の裾を引被ぐ、腕が白く、扱帯の紅が透いた時、わつと小児が泣いたので、

「おお。」

と云つて添臥そいぶしたが、二人も黙る内、すやすやとまた寝入った。

「ねえ、貴郎あなた、そうして、小松原さんのおつしやる通りになさいよ。何だか可恐こわいんですもの。」

と弄からかうごとく、団扇を膝でくると遣やる。

「いいえ、ですがね、あの御骨おこつ……」

「ちよつと待て、御骨は気になる。はははは。」

「御免なさいましよ。」

と客に云つて、細君は、小児こどもに添乳そいちの胸白く、搔か巻まき長う、半ば起きて、

「串じょうだん戯ごではなくつてよ。貴郎あなたが持つて来て、あそこへ据すえてから、玄関かたの方なんぞも、

この間中種々いろんな事を言つてゐるんですよ。

話声がするの、跽あしおと音が聞えるのつて——大方女中なんかを徒いたずらに威おどすんだろうと思つて、

気にもしないでいましたけれども、今のお話の様子だと、何だか、どうとも言えませんが、
。」

「ねえ、小松原さん、」

とぼかしたような顔が、蚊帳の中で朧おぼろに動いて、

「あの御骨おこつだって、水に縁があるんですもの。」

「婦女子の言です。」

と医師せんせいは横を向く。小松原は、片手を敷布の上、隣室となりへ摺寄すりよる身構えで、

「水に縁と……仰有おつしやると？」

「あれは貴下あなた、何ですわ、つい近い頃、夫やじが拾つて来て、あすこへ飾つたんですがね。その何ですよ、旧もとあつた処は沼なんですつて。」

「沼！」

「おつと直ぐに、そう目の色を変えるから困る。鯰なますに網を打ちはしまいし、誰が沼の中か
ら、掬すくい上げるもんか。」

「だって、そりや沼からじやありますまいけれど、梅雨あけに水が殖ふえたので、底から流な
出がれだしたんだろうツて、貴郎あなたがそう言つていらしたではありませんか。——小松原さん、

この梅雨あけにも田圃へ水が出ましてね、先刻おつしやいました、踏切の前の橋も落ちたんですよ。蒼沼が溢れたんですって、田圃の用水は、皆そこから来るんだって申します……

その近処の病家へ行きました時に、其家の作男が、沼を通りがかりに見て来たって、話したもんですから、夫が貴下、好事にその男を連れて帰りがけに、廻道をして、内の車 夫に手伝わして、拾つて来たんですわ。

御骨は、沼の縁に柔な泥の中にありましたって、どこも不足しないで、手足も頭も繋つて、膝を屈めるようにしていたんだそうです。」

「妄誕臆説！」

と称えて、肩を一つ団扇で敲く。

「臆説って、貴下がお話しなすった癖に。そうしてこう骨になってから、全体具っているのは、何でも非常な別嬪に違いない。何骨とか言つて、仏家では菩薩の化身とさえしてある。……第一膝を折つた身 骸の可い処を見ろつて、さんざん効能を言つたではありませんか。」

と、もう小児も寝たので、搔卷からするりと出て棲を合わせる。

医師せんせい喟然きげんとして、

「宜よろしく頼む。あとは君にまかせるから、二人して、あの骨をその人だとしても何とでも御ぎ意いなさい、こちらへ来て講中にならんか。」

と笑いながら、むずと蚊帳を出て、廊下へ寝衣ねまきで突立つったった。
が横向に隣を見て、

「何だ、お前も手水ちようずか。馬鹿な、今の話しで不気味だからって。お客様の居る処を、連立って便所へ行く奴があるかい。」

と言う。

小松原が、ト透すかすと、二重遮ふたえつて仄ほのかではあるが、細君は蚊帳の中を動かずにいたのである。

「貴郎あなた、」

とこの時、細君の声は、果せる哉かな、太く震えて、

「貴郎……」

「うむ、」

小松原も蚊帳の中に悚然ぞっとして、

「酒田。」

と変な声をする。

「誰か居ますか。」

「おお……」

と医師^{せんせい}は、蹠^{よろ}蹠^{よろ}けたように、雨戸^{うしろ}を背に、此方^{こなた}を向き替え、斜^{なり}めに隣室^{となり}の蚊帳^{のぞ}を覗^{のぞ}いた。

「私はここに居ますんですよ。」

「誰だ、今のは？」

うっかり医師^{せんせい}が言うや否や……

「厭^{いや}……」

と立つて、ふらふらと、浅黄に白地で蚊帳^{くぐ}を潜^{すそ}ると、裾^{すそ}と裾^{すそ}とにばつと挟^くまる、と蜘蛛^{くも}の巣^すに掛^かつたように見えたが、一つ煽^{あお}つて、すつと瘦^やせたようになって、此方^{こなた}の蚊帳^{のぞ}へ——廊下^{りやうか}に事はあるものを、夫を力にそこへは出られぬ——腰^{こし}を細く、乗るばかり、胸^{むね}に縋^{すが}った手が白く、小松原の膝^{ひざ}にしがみついた。

——この状^{さま}を……後に、医学士^{いがくし}が人に語る。——

「蒼沼の水は可恐しい、人をして不倫の恋をなさしむるかと、私は嫉もうとした。」

二十二

その時医師は肩を昂げて、

「雨かな。」

と仰向けになつたが、また、俯向いて胸を払つた。

「何だ、廊下は水だらけだ。」

細君は何にも言わぬ。小松原も居窘まつて、忙しく息をするばかり。

鶏が鳴いたので、やっと細君が顔を上げたが、廊下に突立つた夫を見た時、聞耳を立てて、

「何です……がたがた、がたがた言つて、」

小松原が、

「あ、」

「あれか、」

と医師^{せんせい}もそこで聞取った。

「酒田……先刻^{さつき}のも、」

「むむ、診察処だ。」

「あれえ。」

「開けて見ると何にも居ないのだ。が、待てよ。」

と言つて、蚊帳の周囲^{まわり}をぐるりと半分、床の間をがたりと遣^やると、何か提^{ひつさ}げた、その一腰、片手に洋燈^{ランブ}を翳^{かげ}したので、黒塗^{くろぬり}の鞆^{さや}が、袖をせめて、つらりと光った。

「危い、貴郎^{あなた}、」

「大丈夫だ。」

「いいえ、」

細君は一声、誰かを呼んで、

「玄関の方を起して下さい、正吉——」

もう医師^{せんせい}の姿はなかった。

ばたん、と扉^{ひらき}の開いた音。

二人が揃つて、蚊帳の中を廊下際で、並んで雨宿りをする姿で立った処へ、今度は静^{しずか}に

悠々と取つて返す。

「どうした。」

すつぽん
「鼈だ。」

「え。」

「鼈が三個よ。」

「どこに、ですえ。」

と細君は齒の音も合わぬ。

せんせい
医師は真面目な顔して、

「場所はずと悪い、白いものの前だ。」

「あれ。」

「さぞまた蒼沼から、迎^{むかえ}に来たと言うだろうなあ。」

と雨戸を一枚、颯^{さつ}と風が入つて、押伏^{おっぶ}せて、そこに置いた洋燈^{ランプ}が消えた。

が、鶏^{もと}がまた鳴いて、台所で誰か起きた。

白骨^{もと}が旧^{もと}の沼へと立返ることになつて、この使者は、言うまでもなく小松原が望んで出た。一夜^{ひとよ}の縁^{えにし}のみならず、そこは、自分とあの人とがために浮名を流した、浜田の水^{みな}の源^{もと}。

ぞと聞くからに、顔を知らぬ許婚に初めて逢いに行く気もすれば、神仙の園へ招待されたようでもあって、いざ、立出づる門口から、早や天の一方に、蒼沼の名にし負う、緑の池の水の色、峰続きの松の梢に、髻髯として瑠璃を湛える。

その心は色に出て、医師は小松原一人は遣らなかつた。道しるべかたがた、介添に附いたのは、正吉と云う壮い車夫。

国手お抱えの車夫とあると、ちよいと聞きには俠勇らしいが、いや、山育ちの自然生、大の浄土宗。

お萩が好の酒嫌いで、地震の歌の、六ツ八ツならば大風から、七ツ金ぞと五水りようあれ、を心得て口癖にする。豪いのは、旅の修行者の直伝とあって、『姑蘇啄麻耶』と呪して疣黒子を抜くという、使いがらもつて来いの人物。

これが、例の戸棚掛の白布を、直ぐに使って一包み、昨夜の一刀を上に乗せて、も一つ白布で本包みにしたのを、薄々沙汰は知つていながら、信心堅固で、怯気ともしないで、一件を小脇に抱える。

この腰の物は、魔除けに、と云う細君の心添で。細君は、白骨も戻すと極り、夜が明けると、ぱつと朝露に開いた風情に元気になつて、洗面の世話をしながら、縁側で、向

うの峰を見て顔を洗う小松原に、

「昨晚はお楽しみ……なぜって。まあ、憎らしい。奥さんが逢いにいらつしやったではありませんか。」

など遣つたものだが、あえてこれは冷評したのではない。その証拠には、小松原と一足違に内を出て、女子扇と御経料を帯に挟んで、じりじりと蟬の鳴く路を、某寺へ。供養のため――

二十三

「沼さ行く道はこれを入るだよ。」

と正吉が言う処を、立直つて見れば、村の故道を横へ切れる細い路。次第高の棚田に架つて、峰からなぞえに此方へ低い。田の青さと、茂つた樹立の間を透いて、六月の空は藍よりも蒼く、日は海の方へ廻つて、背後から赫と当るが、ここからは早や冷い水へ入るよう。

三方、山の尾が迫つた、一方は大なる楓の梢へ、青田の波が越すばかり。それから青

芒^{すき}の線を延^{のば}して、左へ離れた一方に、一叢^{ひとむらだち}立の藪^{やぶ}があつて、夏中日も当てまい陰暗く、涼しきは緑の風を雲の峰のごとく、さと揺出^{ゆりだ}し、揺出す。その上に、萱^{かや}で包んだ山が見えたが、遠いと覺しく、峰の松が、鹿のゝんだ姿に小さい。藪に続いた一方は雑木林で、颯^{さつ}と黒髪を捌^{さば}いたごとく、梢^{うらう}が乱れ、根が茂る。

路はその雑木の中に出^い入りつ、糸を引いて枝折^{しおり}にした形に入る……赤土の隙間なく、凹^{くぼみ}に蔭ある、樹の下^{したやみ}闇の鰭^{ひづめ}爪の跡、馬は節々通うらしいが、処がら、竜^{たつ}の鱗^{うろこ}を踏むと思えば、鼈^{すっぽん}の足痕^{あしあと}を辿^{たど}るよとも疑われた。

次第に山の裾を分け上ると、件^{くだん}の楓を左の方に低く視^{なが}めて、右へ折曲^{おりまが}つてもう一谷戸^{ひとやと}、雑木の中を奥へ入ろうとする処の、山^{やまふところ}懷の土が崩れて、目の下の田までは落ちず、徑^{こみち}の端に、抜けた岩ごと泥^{うずたか}が堆^{たか}かつた。

「沼はこの先でがんす。」

と正吉^{さきち}は前^{さき}へ立つた。……山崩れで、ここに路の切れたのも、何となく浮世を隔てた、意味^{うなず}ありげにぞ頷^{うなず}かるる。

「梅雨^{せんせい}あけに、医師と、この骨^{こつ}さ拾^ひいに来^きつけ。そんなころの雨に緩んだだね。腕車^{くるま}もはい、持^{もつた}立てるよう^{もつた}にしてここまでは曳^ひいて来ただが、前^{さき}あ挺^{てこ}でも動きましねえでね。」

と言う。

このあたり……どこかで何の鳥か一つ鳴出した。何、正体を見れば、閑古鳥にしろ、直そこいらの樹の枝か葉隠れに、翼を搔込んだのが、けろりとした目で、閑に任かして、退屈まぎれに独言を言っているのであらうけれども、心あつて聞く者が、その境に臨むと、山から谷、穴の中の蟻までが耳を澄ます、微妙な天樂であるごとく、唳々として調べ奏でる。

……きよ、きよら、くらら、くららっ！

と転がして、発奮みかかつて、ちよいと留めて、一つ撓めておいて、ゆらりと振って放す時、得も言われず銀鈴が飴に響く。

小松原は、魂を取って扱かれるほど、ひしひしと身に堪え、

「……京から、今日ら……来るか、来るか！」

と言われるようで、

「来ました、東京から今日来ましたよ。」

と胸の裡で言った。

その蒼沼は……

小高い丘に、谷から築き上げた位置になつて、対岸^{むこう}へ山の青^{あお}簾^{すだれ}、青葉若葉の緑の中に、この細路を通した処に、冷い風が面^{おもて}を打つて、爪^{つまさき}先寒う湛^{たた}えたのである。

水の面^{おも}は秋の空、汀^{みぎわ}に蘆の根が透く辺りは、薄濁りに濁つて、二葉三葉折れながら葉ばかりの菖蒲^{あやめ}の伸びた蔭は、どんよりと白い。木の葉も、ぱらぱらと散り浮いて、ぬらぬらと蓴菜^{ぬなわ}の蔓^{つる}が、水筋を這^はい廻る——空は、と見ると、覆^{おおい}かかるほどの樹立はないが、峰が、三方から寄合^{おちかた}うて、遠方^{おちかた}は遠方なりに遮つて、池の周囲^{まわり}と同じ程より、多くは天を余さぬから、押包^{おっつつ}んだ山の緑に藍^{あい}を累^{かさ}ねて、日なく月なく星もなく、倒^{さか}に沼の中心に影が澄んで、そこにこそ、蒼沼の名に聞ゆる威厳をこそ備えたれ。何となく涸^かれて荒^{すさ}びて、主^{ぬし}やあらん、その、主の留守の物寂しい。

二十四

濃い緑の雑樹の中へも、枝なりにひらひらと日の光が折^{おれ}込んで、縁^{ふち}を浅黄に、木の葉を照らす。この影に、人は蒼白^{あおしろ}く一息した。

なぜか、葬礼^{とむらい}の式に列^{つらな}つたようで、二人とも多く口数も利かなかつたが、やがて煙草^{たばこ}

も喫^のまないで、小松原は踞^{つくば}つた正吉を顧みて、

「どこで拾ったね。」

「やあ、それだがね……先刻^{さつぎ}から氣い付けるだか、どうも勝手が違ったぞよ。たしか、そこだつくと勘考します、それ、その隅^{だか}つこの、こんもり高^{たか}な処^{ところ}さ、見さつせいまし、己^{おら}あ押魂^{おったまげ}消ただ。その節あんな芭蕉^{ばしやう}はなかつけ。」

と言う。

目覚しいのは、そこに生えた、森^{あざむ}を欺^{あざむ}くような水芭蕉^{みづばしやう}で、沼の片隅から真^{まつ}蒼^{さお}な柱を立てて、峰を割り空を裂いて、ばさばさと影を落す。ものの十丈もあらうと見えて、あたかもこの蒼沼^{さつ}に颯^{さつ}と萌黄^{もへぎ}の窓帷^{カアテン}を掛けて、倒^{さか}に裾^{すそ}を開いたような、沼の名は、あるいはこれあるがためかとも思われた。

正吉が知らずと云う、梅雨あけの頃は、まだ丈伸びぬ時節であるから、今日見付けたのを、訝^{いぶ}しむ仔細^{しさい}は無い。

さて、家を出る時から、拾った場所へ旧^{もと}の通り差置こうというではなく、ともあれ、沼の底へ葬り返そうとしたのであるが、いざ、となると汀^{みぎわ}が浅い、ト白骨^{あばら}は肋^{あばら}の数も隠されず、蝶々蜻蛉^{とんぼ}の影はよし、鳥の糞^{ふん}にも汚^{けが}されよう。勢い諸手高く差翳^{さしかざ}して、えい！ と

中心へ投込まねばならぬとなった。

「そんな事が出来るものか。」

と小松原が猶予^{ためら}うと、

「成程、へい、手荒だね。」

と正吉さえ頷^{うなず}くのである。

ここで、小松原が心着いたのは、その芭蕉で……

「まあ、それを解け。」

と手伝つて、上包の結^{むす}目を解くと、ずしりと圧^{おし}にある刀を取ったが、そのまま、する

りと抜きかける。――虹^{にじ}のごとく、葉を漏る日の光に輝くや否や、

「わッ！」

と正吉が飛退^{とびしき}った。途端に白布^{しろぬの}の包は、草に乗って一つ動く。

「旦那^{だんな}、氣^{たしか}イ確に持たっせえ。」

昨夜からの小松原の容^{よう}子は、まったく人目には変だった。これは氣が違った、と慌てたらしい。

やがて孫呉^{そんご}空が雲の上を曳^{えい}々^{えい}声で引背負^{ひきつしよ}ったほどな芭蕉を一枚、ずるずると切出すと、

芬ぶんと真まつ蒼さうな香においが樹こもの中に籠こもつて、草の上を引いて来たが——全身ひつ引くるまっつ乗のりつかつた程ほどに大いのである。

小松原は莞爾にこにこ々々しながら、

「さあ、これへ乗せよう。」

まざまざと見るには堪えぬから、その布で包んだまま、ただ結目を解いただけで、密そつと取とつて、骨を広葉ただなかの只中へ。

葉先みぎわを汀あしずへ、蘆摺あしずれに水へ離せば、ざわざわと音がして、ずるりと沁すべる、柄を向うへ：

：

「南無阿弥陀なんまいだ 南無阿弥陀。」

と殊勝に正吉が、せめ念仏で畳掛けるに連れて、裂目が鰭ひれのように水を捌さばいて行く、と小波さざなみが立つて、後を送つて、やがて沼の中ばに、静しづと留まる。

そのまま葉が垂れると、縋すがりつく状さまに、きらきらと水が乗る、と解けるともなしに柔かに、ほろほろと布が弛ゆるんで、細長い包みの裾が、ふっくりと胸おんなになり、婦ふが臥した姿になる。

思出して、はつと目を塞ふさいだが、やがて見れば、もう沈んだ。

途端に、ざらざらと樹が鳴つて、風が走る。そよ風が小波立てて、沼の上を千条百条の目を絞つて掛寄せ掛寄せ、沈んだ跡へ揺かけると、水鳥が衝と蹴たごとく、芭蕉の広葉は向うの汀へ、するすると小さく片寄る。

二十五

……きよ、きよら、きよきよら、くららっ！……

と、しばらくはただ鳥の声。

熟と沼の面を見ていると、どこかに、その人の顔がある。が、水の皺が揺つては消し揺つては消す——そうかと思うと、その水紋の揺めく綾が、ちらちらと目になって、瞳が流るるようでもある。ソレ鼻、ソレ口、と思う処が、ふらふらと浮いて来ては、仰向けに沈んで消える。もうちつとで、もうちつとで……と乗出すけれども、もうちつとで絡らない。急つて、跪いて、立ったり居たり、汀もそちこち、場所を変えてうろついて見込んだが、ふと心づいて、せば、早や何が染るでもなく、緑は緑、青は青で、樹の間は薄暮合。

「旦那もう晩方だよ。」

と云つて、正吉が帰途を促がしたのは余程の前で、それを、無理遣りに一人帰してから
さえ、早や久しい。

ひとり
独になつて、思うさま、胸にたたんだ空想に耽ろうと、待構えたのはこれからと、まず、
ゆつくり腰を卸して、衣紋まで直して、それから横になつて見たり、起返つて見たり。

とかくして沼の中を、身動きもしないで覗込んだ……

あわれ水よ、偉なる宇宙を三分して、その一を有する汝、瀬となり、滝となり、淵とな
り、目のあたり我が怪しき恋となりぬ。

いで、霧となつて虹を放ち、露と凝つて珠ともなる。ここに白骨を包んでは、その雪の
ごとき膚とならずや、あの濡れたような瞳とならずや。

と思ひ思う、まさしく、そこに、水底へ、意中の夫人が、黒髪長くかかつて見ゆる。

見ようとすると、水が動く。いや、いや、我が心の動くために、人の姿が散るのであ
う。

胸を打つて、襟を掴んで、咽喉をせめて、思いを一処に凝らそうとすれば、なおぞ、
千々に乱れる、砕ける。いつそ諸共に水底へ。

が、確かにその人が居ようか怪しい。……いや、まさしく、そこに、いまし葬った骨があ

る。骨は確に……確に骨は、夫人がここに身を投じて、朽ちず、消えず、砕けぬ——白き珊瑚の玉なす枝を、我がために残したことは、人にこそ言わね、昨夜より我は信じて疑わぬ。

何が不足で一所に死ねぬ——

「その肉身か。」

と己が頭髮を掴んで、宙に下がるばかり突立った。

「卑怯だ、此奴！ 始からそれは求めぬ誓であつた。またそれを求むる位なら、なぜ、

行方も知れず捉うる影なきその人を、かくまで慕う。忘れられぬはその霊であらう。……

その霊は、そこにある、現在骨まである。何が、何が不足で飛込めない。

肉身か、あるいはそれもある。沼の水は、すなわち骨を包む膚、溺れて水を吸うは、な

おその人の唇に触れるに違わん！」

入れ、入れ、入れ、さあさあさあさあ、と水が引き引き、ざわざわと蘆を誘つて、沼の

真中へ引寄せる。

小松原は立つたまま地を踏んだが、

「ええ！ 腑効ない。」

どっかり草へ。

蘆の葉末に水を載せて、^{はすえ} 昼の月の浮いて映るがごとく、沼のそこに、腕か、^{かいな} 肩か、胸か、乳か、白々と漾い居る。^{ただよ}

ソレソレ手に取るばかり、その人が、と思いながら、投出して見ても足がまだ水へは達^{とど}かぬ。

何をか疑い、何をか猶予^{ためら}う。

余の事に、^{あまり} ここへ来るは今日には限らないと思切つて、はじめて悚然^{ぞつ}として、帰ろうとして、骨を送つた船の漾^{ただよ}う処を視^{なが}むれば、四五本打つた、杭^くの根に留^{とま}つたが、その杭から、友染^{ゆうぜん}の切^{きれ}を流した風情で、黄昏^{たそがれ}を翡翠^{かわせみ}が一羽。

二十六

それをこう視^{なが}めた時、いつもとろとろと、眠りかけの、あの草の上、樹の下に、^{うつくし} 美しい水を見る、描いたるとき ^{ゆめうつ} 夢幻の境、前世か、後世か、ある処の一面の絵の景色が、^{さいしき} 彩色した影のごとくに浮^{うか}んだので、ああ、このままここへ寝るかも知れない。

それも可^{よし}、ままよ、なるようになれとなつた。……

その内に、翡翠^{かわせみ}の背らしいのが、向うで、ぼつと大きくなり、従つて輪郭^{りんかく}は臙^{おぼろ}になつたが、大きくなつたのは近づくので、臙になるのは、山から沼の上を暮増^{くれまさ}るのである。その暮れるのと、来かかるのが、蘆^{あし}の汀^{みぎわ}を段々伝いに、そよそよと風に、背後^{うしろ}を、吹かれ、送られ、近づいて、何の登音^{あしおと}も聞えなかつたが、上^{かみ}からか下^{しも}からか、小松原の目に、婦^{おんな}の色ある衣^{きぬ}の裙^{すそ}が見えて、傍^{かたわら}に来て、しつとり留^{とま}る。……

「奥さん。」

と、我知らず叫んだが、はつと気が附いても枕はしていず、この時は、診察室の寢台^{ねだい}でなかつた。そこで、

「……………」

誰かが何か言う。ただ赫^{かつ}として、初手のは分らなかつた。瞳を凝らして、そのすつと通つた鼻筋と、睫毛^{まつげ}が黒く下向にそこに彳^{たらず}んだのを見出した時、

「立二さん。」

と胸を抱いた手が白く、よくは分らぬけれども、着たものの柄にも因るか、しばらくの間に、やや太^{ふとり}肉^{じし}だった人が、げつそりと瘦^やせて小さくなった。

「おお！」

とばかりで、肩で呼吸いきして、草に胡坐あぐらしたまま、己おのが膝を引ひ掴つかんで、せいせい言つて唇を震わす。

上では、俯向きうつむさまに、髪が揺れたが、唇の色が燃え、得も言われぬ微笑ほほえみして、

「変つた処で……あんまりだから、お化だと思うでしょう。」

と相変らずしとやかなものの言いよう哉。

それどころか、お化……なら、お化で、またその人ならその人で、言いたいことが一切経、ありつたけの本箱を引ひくり返したのと、知つただけの言ことばを大おお絡まとにしたのが、一いちど斉きに胸へ込上げて、咽喉のどで支つかえて、ぎゅうとも言えず、口は開あかずに、目は動く。

「それでも、」

と鬢びんへちよいと手を遣やつたが、櫛くし、笄がかんざし、簪かんざし、リボン、一ツもそんなものは目に入らなかつた。

「まさか、墓へは連れて行かないから、私の許とこへ御一所に。」

指ゆびさして、指の先で、男が只ひた瞻みりに瞻みつた瞳を、沼の片隅に墨で築ついた芭蕉の蔭へ、触つて瞬かせるまで、動かさせて、

「あすこを通つて、^{そばづた}岨伝いに出来る里。……立さん、そんなに^{びつくり}吃驚なさらなくても、貴下^{あなた}が昨日、お医師^{いしや}様の許^{ところ}へおいでなすつた事は、私もう知っています。

いつかの時の怪我^{けが}でねえ、まだ時々、時候の変り目に悩みますから、梅雨時分、あのお医師様にお世話になったの、……私のね、今隠れている百姓屋へ来て貰つて……

立さんが、先刻^{さつき}葬式^{おとむらい}にいらした、この沼の白骨も、その時私の許で聞いて、あの方がここへ来て拾つて行つたんです。

この頃、また、ちつと塩梅^{あんばい}が悪いので、医師^{いしや}へ通つていますから、今日こちらへお出でなさる事も、貴下がお出掛けの直ぐあとへ行つて聞いて来しました。

先刻^{さつき}から、あちこちで、様子を見ていましたけれども、^{そば}傍に人が居るから、見られるのが可厭^{いや}で来ませんでしたよ。

さあ、いらつしやい。」

「……参ります!」

とだけは決然として気競^{きお}つて云つたが、膝^なが萎えて、がくついて、ついした事には行^ゆかないで、

「貴女、貴女、」

とばかり言う。

「まあ、何にもおつしやらないで。何事も、あの、内へ行つてから、ゆっくりお話をしましょうね。」

と軽く頷く、頬がつくと、襟の処が薄く曇つて、きらきらと露が落ちた。

二十七

その涙を払う状に、四辺を見つつ、

「御覧なさい、可厭な。どこより前に、沼の上が暗くなりました。これが、あの田の水の源なんですもの。またいつかの時のような事があつては悪い。」

と調子はおっとり聞こえたが、これを耳にすると斉しく、立二は焼火箸を嚙んだように突立った。

ト、佳い薫が、すつと横を抜けて通つて、そのまま後姿で前へ立つて、尋常に汀を行く。……お太鼓の帯腰が、弱々と、空から釣つたように、軽く、且つ薄い。

そこへ、はらはらとかかる白絹の袂に、魂を結びつけられたか、と思うと、筋骨のこ

んがらかつて、捌さばのつかないほど、揉もみ立てられた身体からだが、自然あらに歩ある行く。……足はどこを踏ふんだか覚えなし。

しばらく行くと、その人が、偶ふと立停たちどまつて、弱腰じやくを捻ねじて、肩へ、横顔で見返つて、
「氣をつけて頂戴、沼の切れ目よ。」

と案内する……処に……丸木橋が、斧おのの柄の朽ちた体ていに、ほろりと中絶えがして折込おれこんだ上を、水が糸のように浅く走つて、おのれ、化ける水の癖に、ちよろちよろと可憐しおらしやか。ここには葉ばかりでなく、後おくれ咲ざきか、返り花が、月に咲いたる風情を見よ、と紫の霧を吐いて、杜かきつばた若たが二三輪、ぱつと花弁はなびらを向けた。その山の端はに月が出た。

「今夜は私が、」

すつと跨またぐ、色が、紫に奪われて、杜若すそに裙すそが消えたが、花から抜ける捌さばいた裳もすそが、橋の向うで納おさまると、直ぐに此方こなたへ向替えて、

「手を引いて上げましょう。」

嫋娜なやかに出されたので、ついその、伸のせば達とどく、手を取られる。その手が消えたそうに
我を忘れて、可なつかし懐かおりい薫かおりに包まれた。

まだ耳の底に絶えなかった、あの、きよ、きよら、くらら鳥の声が、この時急に変わった。

野太く、図抜けた、ぼやつとした、のろまな、しかも悪く底響きのするのになつて、

……おのれら！ おのれら！……

と鳴く。

ぎよつとして、仰いで見る、月影に、森なす大芭蕉おおばしやうの葉の、沼の上へ擡ぬきんでたのが、峰たてから伸出のしだいて覗くかと、頭かしらに高う、さながら馬の鬣たてがみのごとく、譬たとえば長髪を乱した体ていの、ばさもある附元つけもとは、どうやら瘦こけた蒼黒い、尖とがつた頤おとがいらしくもある。

あれあれ裂けた処が、そつくり口で、

……おのれら！……

とまた鳴いた。その体ていは……薄汚れた青竹ふとづえの太杖ふとづえを突いて、破目やぶれめの目立つ、蒼黒い道服ちやくを着きに及およんで、丈高せいう跳のさばつて、天上から瞰下みおろしながら、ひしやげた腹から野良声を振絞ふりしぼつて、道教うる仙人のように見えた。

その葉が大きく上にかぶさる、下したにイいたで熟じつと見た、瞳うろが霑ぬんで溜息ためいきして、

「立さん、立さん、」

と手を取つたまま、励ますように呼掛けて、

「憎らしいではありませんか。あの芭蕉が伸拡がつて、沼の上へ押覆おつかぶさるもんですから、

御覽なさい。出汐をこうして隠すんですもの。空へ上れば峰へ伸る、向うへかかれば海へ落ちて、いつ見ても、この水に、月の影が宿りません。

可哀相に。いつかの、あの時、月の影さえ見えたらばと、どんなに二人で祈ったでしよう。身につまされて涙が出る。まあ、この沼の暗いこと！ 外は、あんなに月夜だのに。

……」

翳せばその手に、山も峰も映りそう。遠い樹立は花かと散り、頬に影さす緑の葉は、一枚ごとに黄金の覆輪をかけたる色して、草の露と相照らす。……沼は、と見れば、ここからは一面の琵琶を中空に据えたようで、蘆の葉摺れに、りんりんと鳴りそうながら、一條白銀の糸も掛らず、暗々として漆して鼠が駈廻りそうである。

「先刻、貴下がなすつたついでに、もうちつと切払って下されば可かつたのねえ。」

ただ等閑に言い棄てたが、小松原は思わず拳を握った。生れて以来、かよわきこの女性に対して、男性の意気と力をいまだかつて一たびもために露わし得た覚がない。腑効なさもそのドン詰に……

しや！ 要こそあれ。

今も不思議に片手に持った、鞘を棄てて、提げて衝と出たが、屹と見上げて、

「おのれ！」

と横薙、刃が抜けると、そのもの、長髪をぎつと捌く。驚破天窓から押潰すよと、思うに肖ず、二丈ばかりの仙人先生、ぐしやと挫けて、ぴしやりとのめずる。

これにぞ、氣を得て、返す刀、列位の黒道人に切附けると、がさりと葉尖から崩れて来て、蚊帳を畳んだように落ちる。同時に前へ壁を築いて、すつくと立つ青仙人を、腰車に斬つて落す。拜打、輪切、袈裟掛、はて、我ながら、氣が冴え、手が冴え、白刃とともに、抜けつ潜りつ、刎越え、飛び交い、八面に渡つて、薙立て薙立て、切伏せると、ばさばさと倒れるごとに、およそ一幅の黒い影が、山の腹へひらひらと映つて、煙が分れたように消える、とそこだけ、はつと月が射して、芭蕉のあとを、明るくなる。果は丘のごとく、葉を累ねた芭蕉の上に、全身緑の露を浴び、白刃に青き雫を流して、逆手に支いてほつと息する。

棲取りながら、そこへ来て、その人が肩を並べた。

白刃を落して、その時腕をさすつて憩う、小松原の手を取つて、

「ああ、嬉しい。」

と、山の端出でたる月に向つて、心ゆくばかり打仰いだ。背撓み、胸の反るまで、影を

飲み光を吸うよう、二つ三つ息を引くと、見る見る衣きぬの上へ膚はだえが透き、真白な乳ちが膨らむは、輝く玉が入ると見えて、肩を伝い、腕かいなめくを繞り、遍く身内の血と一所に、月の光が行通れば、晃々きらきらと裳もすそが揺れて、両の足の爪つまさき先に、美しい綾うつくしあやが立ち、月が小波ささなみを渡るように、滑なめらかに襷ひだを打った。

啊あなや呀と思うと、自分の足は、草も土も踏んではおらず、沼の中なる水の上。

今はこうと、まだ消え果てぬ夫人に縋すがると、靡なびくや黒髪、澆ばうと薰かかつて、冷つめたく、涼すずしく、たらたらと腕かかに掛る。

………小松原は、俯うつむ向けに蒼沼に落ちた処を、帰宅かえりのほどが遅いので、医師せんせいが見せに寄越よこしした、正吉に救われた。

車夫は沼の隅の物音に、提ちようちん灯を差出したが、芭蕉の森に白刃が走る月影に恐おそれをなして、しばらく様子を見ていたと言う。

小松原が恢かいふく復して、この話をした時、医学士は盃を挙げて言った。

「昔だと、仏門に入る処だが、君は哲学を学やつとる人だから、それにも及ぶまい。しかし、

蒼沼は可怪^{あや}しいな。」

明治四十一年（一九〇八）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一巻」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年3月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

沼夫人

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>